

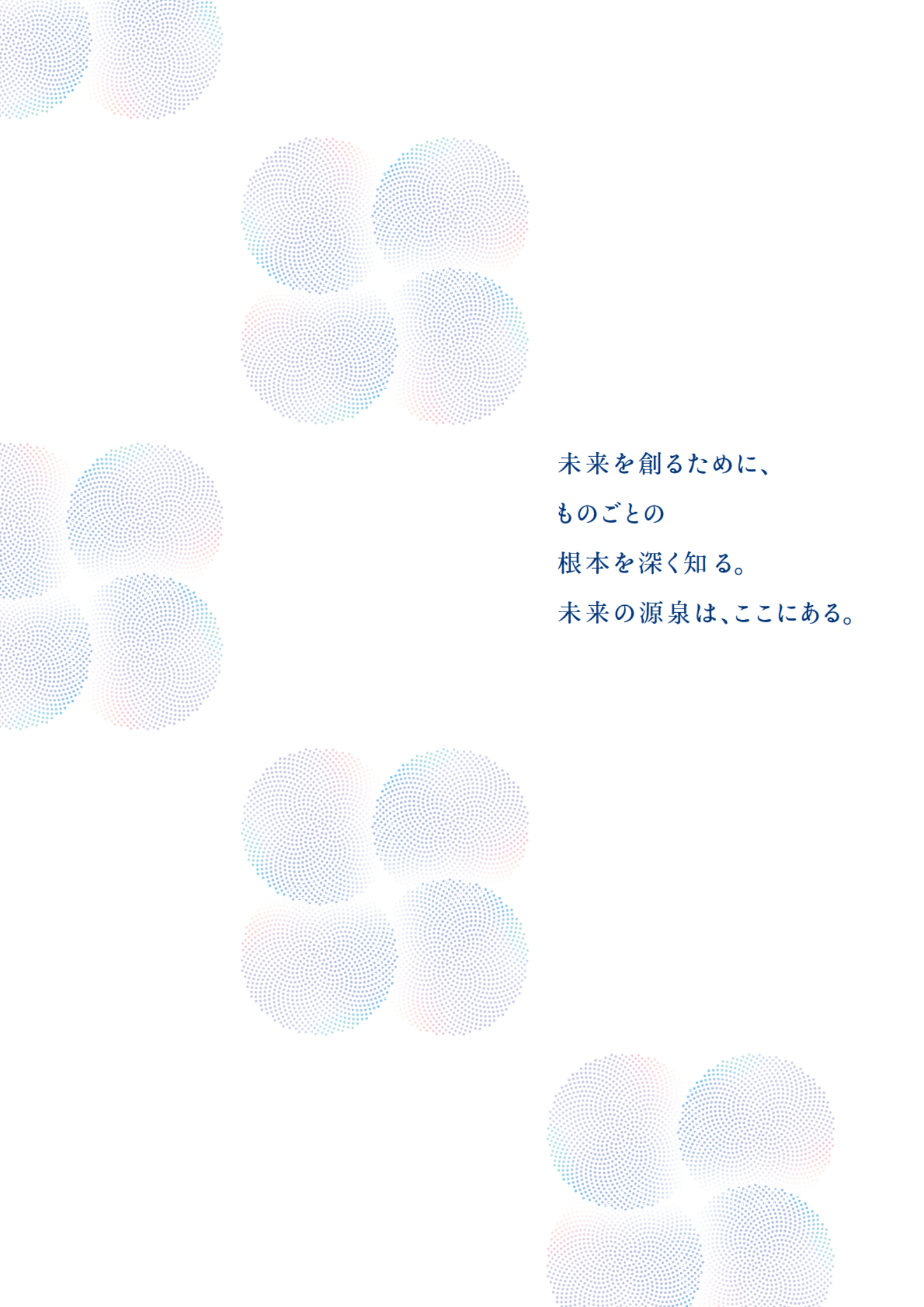
Kyoto University Executive Leadership Program

Lecture outline

2025

京都大学
エグゼクティブ・リーダーシップ・プログラム

講義概要



未来を創るために、
ものごとの
根本を深く知る。
未来の源泉は、ここにある。

contents

総長よりご挨拶 湊 長博

前期

人文科学	赤松 明彦 [インド哲学] 芦名 定道 [キリスト教学] 上原 麻有子 [近代日本哲学] 平川 佳世 [西洋美術] 山本 淳子 [平安時代の文化・文学]
社会科学	依田 高典 [行動経済学] 岸 政彦 [社会学] 広井 良典 [公共政策]
自然科学	小川 順 [応用微生物学] 金出 武雄 [ロボット工学・人工知能] 小西 哲之 [エネルギー] 坂口 志文 [免疫学] 滝田 順子 [小児がん] 橋本 幸士 [素粒子論] 平田 晃久 [建築学] 森 和俊 [分子生物学] 山極 壽一 [人類学、霊長類学]
複合領域	神谷 之康 [ブレイン・デコーディング] 藤原 辰史 [食と農の思想] 明和 政子 [発達心理学]
文化・芸術	宇津木 安来 [日本舞踊] 杭迫 柏樹 [書道] 千 宗室 [茶道]

後期

人文科学	ウスビ・サコ [空間人類学] 岡 真理 [アラブ文学] 小山 哲 [ウクライナ] 鈴木 晶子 [教育哲学] 松山 大耕 [禅]
社会科学	石井 美保 [人類学] 稲谷 龍彦 [科学技術と法] 中西 寛 [国際政治] 待鳥 聡史 [アメリカ政治]
自然科学	伊藤 美千穂 [生薬学] 北川 進 [無機化学] 田村 恵子 [緩和ケア] 土井 隆雄 [有人宇宙学] 西村 卓也 [地震] 益田 玲爾 [魚類心理学] 湊 長博 [免疫学] 山敷 庸亮 [宇宙移住] 渡邊 大 [生体情報科学]
複合領域	浅利 美鈴 [環境教育論] 内田 由紀子 [社会心理学]
文化・芸術	池坊 専好 [華道] 金剛 永謹 [能楽] 樂 直入 [樂焼]

務本之学

「務本の学」とは、即ち「本(もと)を務むの学」。
先の見えない複雑な世界だからこそ、枝葉末節ではなく、
本質を理解する学問、務本の学が必要になります。

自然科学

社会科学

複合領域

文化・芸術

人文科学

京都大学ELPの勧め

MINATO Nagahiro

京都大学
湊 長博 総長

京都大学Executive Leadership Program（京都大学ELP）は、現在ビジネスや行政を始め多様な社会の第一線で活躍し、将来各界のリーダー人材として我が国の発展を担っていくことが強く期待されている皆様を対象に、学術・文化・芸術の都である京都の地で、本学を始め斯界を代表する当代第一人者による講義と直接対話を介して、幅広い知識と素養を体得していただくためのリーダーシッププログラムです。

本プログラムは、京都大学構内の由緒ある橘会館（約110年前に竣工された旧帝国大学総長官舎）で行われ、2015年の開始以来昨年度までにすでにのべ160名を超える方々が受講され、非常に好評をいただいております。京都大学ELP受講者には京都大学総長より修了書を授与させていただくとともに、京都大学ELP倶楽部（同窓会）にお入りいただいております。京都大学ELP倶楽部では、同窓生がプログラム修了後も定期的に連絡を取り合い、特別講義や多様な催しを通して、異種業界間での交流や情報交換に大いに役立っているとうかがっています。

さて、今や企業はCorporate Social Responsibility（CSR）を求められ、Environmental, Social and Governance（ESG）が企業投資の重要な指標とされる時代です。とりわけ複雑さを増しつつある国際社会のなかで、経済を始め様々な社会活動の健全なグローバル展開のためには、広汎な知的文化的素養に裏付けられた人と人との円滑なコミュニケーションの力は、一層その重要性を増していると言えるでしょう。

18世紀の産業革命以降、科学と技術の急速な発達により世界の人々の生活は大きな進歩を遂げ、21世紀の今日、先進諸国ではIoTやAIなどの新技術に

より超スマート社会の実現を目指す第4次産業革命の時代に入っています。他方で20世紀末から、世界の気候変動とこれに伴う大規模自然災害、地球環境破壊と生命多様性の危機、人間社会での多様なレベルでの格差と分断の増大や食糧・人口問題、さらには相次ぐ新興感染症とパンデミックなど、文字通り地球レベルでの課題が顕在化してきているのも事実です。

これら諸課題の要因自体は科学によって問うことはできますが、それにより容易に解決に至るとは考えられません。英国の科学哲学者J.Ravetzらは、現代世界が直面している大きな問題は、事象自体の高度の複雑性とそれに係る利害の多様性によって特徴付けられ、「科学（Normal Science）によって問うことはできるが答えることのできない」領域に属しているとして、ポスト・ノーマルサイエンス（PNS）領域と呼んでいます。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックも、まさにPNS領域の問題と言えるでしょう。ウイルスの特性や



感染様式、宿主の免疫応答と病態発生機構などに係る科学的知見は急速に蓄積され、ワクチン開発もかつてないスピードで進められました。しかしこれらが人々の社会活動全般に統一指針を与えうる状況には必ずしもなく、その背景には、地域によって異なる社会習慣や宗教、政治体制、他方では様々な社会活動や多様な職業によって異なる利害など、多くの要因が複雑に関係しています。

この混乱は、ポストコロナ時代にも、解消されるとは考えにくく、むしろ先鋭化する危惧さえあります。さらに早や3年以上に及ぶロシアのウクライナ侵攻によって、世界が新たな分断と抗争の時代に入っていくのではないかという不安と懸念が広がってきていると言えるでしょう。

ビジネスや行政の世界において、複雑で混迷を極めつつある地球社会の中でこれからリーダーシップを取っていく人材には、自らが属する立場の直接利

害に加えて、実に多様な観点からの知識や理解が要求されてくることになるでしょう。人口減少と超高齢化の進行が避けられない我が国で、ビジネスを含め新しいグローバル展開を進めていくに当たっては、学術・文化・芸術などに広い見識と理解をもったリーダー人材こそが今求められているのではないのでしょうか。

京都大学ELPが、来たるべき新時代の幅広い素養と知識を備えた社会のリーダー人材の要請に、そして何よりも受講される皆様の知の喜びと新たな出会いに、少しでも貢献できることを心から期待しています。



Category

人文科学

01

前期

「寛容」について

AKAMATSU Akihiko

ガンディーに学ぶ寛容の精神

赤松 明彦

京都大学 名誉教授



講義概要

ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教、仏教、ジャイナ教、ゾロアスター教、シク教、などなど。インドでは、様々な宗教が、ときにはぶつかり合いながらも共存してきました。ヒンドゥー至上主義が広がりを見せる現代においても、通常は平穏に共存しています。このような状況を指して、インド的な「寛容」と言われることもあります。この講義では、「寛容」とは何かということ、インドの諸宗教の歴史を踏まえた観点から考えてみたいと思います。インド独立の父と言われるガンディーは、「寛容」ということを、まずは「諸宗教の平等」ということから具体化しようとした。それはまた、彼の実践原理であった「非暴力」とも強く結びついています。今回は、このガンディーの思想と行動を通じて、「寛容」について考えます。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

寛容でありたいと思う。不寛容であることがあたかも正義であるかのような言説が横行し、容認と排除の単純な二項対立によってしか世界のあり方が語られないような現代において、寛容であることは如何にして可能か。不寛容の時代にあって、どうすれば寛容であり続けることができるのか。寛容であることは、社会的リーダーにとっては不可欠の徳目である。「非暴力」の抵抗運動によって人々を動かし、イギリスからの独立を実現したガンディーは、そのような寛容の精神を体現した社会的リーダーの代表と言ってもよいだろう。ガンディーの思想と実践を、彼の実際の言葉と行動の中に見ながら、「寛容の精神」について考えることは、様々な暴力が横行する現代世界を生きる私たちにとって、それを乗り越えるテクニックを学ぶことにもなるだろう。

Profile

1953年京都府宇治市生まれ。1972年京都大学文学部哲学科入学。1981年、フランス政府給費留学生として京都大学大学院文学研究科からパリ第3大学第3期博士課程に留学し、1983年に同大学でインド学における博士号を取得した。帰国後、京都大学人文科学研究所助手を経て、1987年から九州大学文学研究科助教授、同教授。2001年～2018年京都大学大学院文学研究科教授。その間、2010年4月～10月文学研究科長・学部長。同年10月～2014年9月京都大学理事・副学長（学生担当）。2018年3月定年退職。同年4月～2023年3月京都大学白眉センター長。京都大学名誉教授。

著書に、『ヒンドゥー教10講』岩波新書（2021年）、『インド哲学10講』岩波新書（2018年）、『バガヴァッド・ギーター：神に人の苦悩は理解できるのか？（書物誕生—あたらしい古典入門）』岩波書店（2008年）、『楼蘭王国：ロブ・ノール湖畔の四千年』中公新書（2005年）、『サンスクリット入門—インドの思想を育んだ「完全な言語」』中公新書（2024年）。サンスクリット原典からの翻訳書として、『古典インドの言語哲学 1、2』東洋文庫（1998年）など多数。

Category

人文科学

02

前期

環境危機とキリスト教

ASHINA Sadamichi

宗教から現代世界を問い直す

芦名 定道

関西学院大学神学部 客員教授
京都大学 名誉教授

講義概要

環境危機の解決は現代世界が直面する深刻かつ緊急の課題であり、理系から文系に至るまで多くの学問が関わりを持っている。宗教研究においても環境は重要テーマである。たとえば、キリスト教思想研究では、環境の神学(エコロジーの神学)は世界的に現在もっとも研究がなされている分野の一つであり、今回の講義ではキリスト教思想における環境の神学(特に世代間倫理との関連)を取り上げてみたい。キリスト教思想研究において環境危機が重要なテーマになったことには、キリスト教思想の側の事情にも基づいている。それは、聖書の創造物語と環境危機の関連性という問いが環境の神学の開始を促したということである。こうして開始された環境の神学からその後どのような議論が展開され、そこから何がわかるだろうか。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

環境危機は、現代を生きるわたしたち全員が共有する課題であり、大学も企業も、一般の市民社会も、そして宗教界も、無関係な者は一人もいない。とすれば、ある分野で展開された議論がほかの分野にとっても何か重要な示唆を与えるものとなるのではないだろうか。場合によっては、特定の分野に取っただけではなく、この社会全体に重要な意味をもつものとなるかもしれない。キリスト教思想における「環境の神学」から環境を考えるヒントを得ることができるならば、それは社会的インパクトを与えるものとなるだろう。キーワードは、世代、家族。

Profile

1956年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程(キリスト教学)単位取得退学。京都大学博士(文学)。京都大学大学院文学研究科教授(キリスト教学担当)を経て、関西学院大学神学部教授。2025年3月31日で、関西学院大学を退職し、4月からは客員教授。

著書に、『東アジア・キリスト教の現在』(三恵社、2018年)、『現代神学の冒険』(新教出版社、2020年)、『脳科学とキリスト教思想』(三恵社、2022)年など。

Category

人文科学

03

前期

「物となつて見、考え、行う」哲学

UEHARA Mayuko

ひもとき、京都学派の技術知を
世界を再考する

上原 麻有子

京都大学大学院文学研究科日本哲学史専修 教授

講義概要

「哲学」という学問は、日本では近代の黎明とともに西洋哲学を翻訳により導入することで開かれた。1930年代早くも、西洋最先端の哲学に決して引けを取らない、日本独自の哲学的立場を確立するに至ったのである。京都学派はその役割を担う代表的な知の集団であったと言える。講義では、学派の思想基盤となった西田幾多郎の哲学に焦点を当て、西田による「物を作る」ための技術論を紹介する。また、準備している課題は次の3つである。1. 西洋近代の哲学的パラダイムの乗り越え、2. 人間関係と社会・環境・世界の多様性に基づく西田的技術知の内実、3. 物作りの現実。「物となつて見、考え、行う」哲学は、今後の私たちの世界に何か貢献するであろうか。受講される皆様とともに考えてみたい。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

京都学派や西田の哲学が、経世済民であるとはいえない。しかし1930-40年代、日本が完全に世界に組み込まれた現実のもと、哲学者たちは個人と全体(社会・環境・世界)の複雑に入り組み、矛盾の内在する関係性を、そういうものとして論理化した。あの昭和の歴史はまだ現代の社会・文化の土台としてリアルに生き続けている。パンデミック、地球環境の激変等により、私たちの世界観は大きく変わろうとしている。技術知は、当時の哲学者たちの予測を大幅に超えて、私たちの生活に幸福と危険の計り知れない矛盾をつきつけている。マニュアルはもう通用しない。しかし、やはり世界変革の歴史を生きた彼らの哲学は、それを更新し続ける思考の深め方、知恵を提供してくれるのではないか。

Profile

京都大学大学院文学研究科教授。総合地球環境学研究所上廣環境日本学センター客員教授。Journal of Japanese Philosophy (ニューヨーク州立大学出版) 編集長。西田哲学会理事、同学会編集委員長(2021-2024年)。日本学術会議連携会員。専門は、西田哲学、京都学派を中心とした近現代の日本哲学、翻訳哲学、女性哲学。フランス国立社会科学高等研究院博士(哲学・翻訳学)。

共著『近代人文学はいかに形成されたか 学知・翻訳・蔵書』勉誠出版(2019年)、共著『危機の時代と田辺哲学』法政大学出版局(2022年)、共著『問いとしての尊厳概念』法政大学出版局(2024年)。

平川 佳世

京都大学大学院文学研究科 教授



講義概要

本講義では、美術史学の思考法や研究法を学び、美術史研究の最新の動向に触れることで、巨匠たちの創造行為の本質に迫ります。題材として取り上げるのは、15、16世紀、すなわち、西洋美術史の革新の時代です。「ルネサンス」と一般に呼ばれるこの時代には、イタリアやネーデルラント（現在のベルギー、オランダなどに該当）をはじめとするヨーロッパの各地で、まさに「巨匠」の名に相応しい才能あふれる芸術家たちが活躍しました。ファン・エイク、レオナルド・ダ・ヴィンチ、デューラー、ラファエロ、ミケランジェロ…。本講義では16世紀の国際商業都市アントウェルペン（アントワープ）で活躍した巨匠クエンティン・マセイス作《両替商とその妻》（ルーヴル美術館蔵）について多角的な視点から考察することで、絵画に秘められた「様々な意味」について迫ります。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

情報化社会の急速な進展、国際紛争、グローバルな人と物の流れ…。目まぐるしく変化する状況のもと、よりよい未来へと続く持続可能な社会の構築のため、今日の私たちには、新たな時代を切り開く柔軟な発想とそれを実現する協働が求められています。本講義では、前近代の絵画に秘められた複雑な要因を紐解くことで、「芸術作品は芸術家個人の創造力の所産であり、美的に味わうもの」という考えから一歩進んで、より多面的な芸術理解を目指します。さらに、名画という「卓越した商品」が、ダイナミックに変容する社会通念に対する鋭い洞察、作り手の優れた発想力と技術力、需要者たちからの助言や要望、国際商業都市ならではの情報ネットワークといった総力を結集して、生み出される様を、追体験します。

Profile

1991年京都大学文学部史学科（考古学専攻）卒業。ビクター音楽産業株式会社勤務を経て、1993年京都大学文学部哲学科（美学美術史学専修）に編入学、1995年同大学院修士課程に進学、2000年同大学院博士後期課程を研究指導認定退学。その間、1998年10月より1999年3月までウィーン大学に留学。博士（文学）（京都大学）。2001年、近畿大学文芸学部講師に着任、助教授、准教授として2008年度まで教鞭をとる。その間、2007年9月より2008年3月まで、ローマ、マックス・プランク美術史研究所に研究滞在。2009年より京都大学文学研究科准教授、2014年3月より半年間、客員研究員としてトリエ大学に滞在、2017年より現職。専門は北方ルネサンス絵画史。

The Pictorialization of Dürer's Drawings in Northern Europe in the Sixteenth and Seventeenth Centuries, Peter Lang, 2009、中村俊春編『絵画にみる私的世界の表象』（「変容する親密圏／公共圏」第3巻）京都大学学術出版会、2012年（共著）、「スプランゲル作《最後の審判》——銅板油彩画の宗教的機能に関する試論」（『京都美術史学』第1号、2020年、所収）等。

Category
人文科学
05
前期

『枕草子』と『源氏物語』の誕生

YAMAMOTO Junko

作品は社会から生まれ、
社会を変える



山本 淳子

京都先端科学大学 国際学術研究院 教授

講義概要

『源氏物語』とその作者・紫式部の名は良く知られています。ことに2024年にはNHKで紫式部を主人公とした大河ドラマ「光る君へ」が放映され、武者の世界の多かった大河ドラマ史に一石を投じました。ただ、『源氏物語』は長く難解で読み通すことが困難なもの事実です。また、最後まで読みとおしても多くの疑問が心に残ることでしょう。

そこでこの授業では、まず『源氏物語』全体の内容を解説します。光源氏の誕生から栄華を極めるまで、その人生に翳りが見え出家を決意するまで、そして彼の子や孫が活躍する宇治十帖の世界と順を追って、テーマの変遷やその意味についても説明します。

また、物語のなかから特に現代と共通する問題を取り上げ、今を生きる私たちが『源氏物語』を読む意味についても考えます。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

古典文学といえば、高校の授業が眠かった記憶しかないという方が多いでしょう。または貴族文化という古めかしく権威的なイメージでとらえられることも多いでしょう。しかし『源氏物語』は、千年前にはエンターテインメントでした。またそのテーマも多様で、恋愛や美だけではなく、例えば政治・権力、友情、親子の関係、人間の成長と衰え、女性の精神的自立など、様々な問題を読み取ることができます。例えば最近ようやく日本社会で取りざたされるようになった「不同意」の性関係などについても、『源氏物語』は鋭く切り込んでいるのです。『源氏物語』を知ることで皆さんがインパクトを受け、まずは自分自身の在り方、ひいては周囲との関係性を考えることが、世の中を変える引き金となるかもしれません。

Profile

平安文学研究者。石川県出身。京都大学文学部を卒業後、石川県立図書館で自治体史「加能史料」の編纂に関わる。その後、高校教員を務めたのち、京都大学大学院人間・環境学研究所に入学。地域文化研究を専攻し、文学と歴史、宗教の壁を超えた学際的研究を志す。2003年、京都学園大学助教授。2007年、『源氏物語の時代 一条天皇と后たちのものがたり』（朝日新聞出版）でサントリー学芸賞（芸術・文学部門）を受賞。2008年、京都学園大学教授。2019年、校名変更により京都先端科学大学教授。著書は受賞作のほか、学術論文集『紫式部集論』『紫式部日記と王朝貴族社会』（いずれも和泉書院）、注釈書に『ビギナーズクラシックス 日本の古典 紫式部日記』『紫式部日記 現代語訳付き』（いずれも角川ソフィア文庫）、教養書に今回の教科書『平安人（びと）の心で「源氏物語」を読む』や『枕草子のたくらみ 「春はあけぼの」に秘められた思い』『道長ものがたり 「我が世の望月」とは何だったのか』（いずれも朝日新聞出版）など。なお、2024年NHK大河ドラマ「光る君へ」に関して、NHK財団のウェブサイト「ステラnet」において1年間、コラム「山本淳子の平安ドラマチック」を連載した。



依田 高典

京都大学大学院経済学研究科 教授

講義概要

近年、ノーベル経済学賞は行動経済学やフィールド実験の分野に相次いで授与されています。行動経済学は、人間がどのようなバイアスを持ち、行動変容が起こるかを探究する学問で、フィールド実験は実生活の場で因果関係を検証します。一方、生成AIの急速な発展により、シミュレーションやデータ分析が飛躍的に向上しましたが、AIにも学習データやアルゴリズムに起因するバイアスが内在しています。人間固有のバイアスとAIのバイアスを比較検討しつつ、これらをビジネスや政策にどう活用するかを学ぶのが本講義の狙いです。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

行動経済学は、人間の不思議な行動を説明する原理として、ビジネスや政策に応用されています。フィールド実験は、介入が行動変容に与える影響を検証する方法として、行動経済学と強く関連しています。さらに、生成AIの進化により、個々人の特性に合わせたAIパートナーが構築され、健康管理や教育、消費行動の最適化などに活用が進んでいます。一方で、AIの社会的影響や倫理的課題も重要であり、これらを考慮しながら人間とAIの協調を探ることが求められます。

Profile

1965年新潟県生まれ。1989年京都大学経済学部卒、1995年京都大学大学院経済学研究科博士課程修了。博士(経済学)。現在、京都大学大学院経済学研究科教授。同研究科長・同学部長(2021~2023年度)。その間、イリノイ大学、ケンブリッジ大学、カリフォルニア大学客員研究員を歴任。専門は応用ミクロ経済学・応用実証経済学。行動経済学・フィールド実験・因果推論ならびに機械学習の融合研究に取り組む。日本学術振興会賞、日本行動経済学会ヤフー論文賞、日本応用経済学会学会賞、大川財団出版賞、ドコモモバイルサイエンス奨励賞等を受賞。

主な著書に『ブロードバンド・エコノミクス』日本経済新聞出版社(2007年)、『行動経済学』中公新書(2010年)、『「ココロ」の経済学』ちくま新書(2016年)、『スマートグリッド・エコノミクス』有斐閣(2017年)、『データサイエンスの経済学』岩波書店(2023年)等がある。

Category
社会科学
02
前期

他者の合理性

KISHI Masahiko

「人生」を理解する社会学

岸 政彦

京都大学大学院文学研究科 教授



講義概要

社会学における質的研究、特に「生活史」の調査研究について概説し、「他者」の人生とその理解についてじっくりと考える。鍵となるのは「合理性」という概念である。生活史(個人の生い立ちや人生の歴史)は、いわば行為選択の連鎖と蓄積である。私たちは生まれてからずっと、日常的に「選択」というものを続けている。そして私たちの人生の選択には、そのつど切実な「理由」がある。合理性概念を媒介として、こうした他者の人生の切実な「理由」と「意味付け」について考えたい。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

私たちの社会はますます不寛容になっている。しかしこの社会には、多様な人びとが事実として存在する。たしかに多様な「他者」の理解は容易ではない。そもそも、他者の感情や意味を、そのままと理解することはできない。しかし私たちは、他者と言葉を交わし、その人生のごく一部についてでも、想像し、共感することはできるはずだ。どのように他者と交わり、他者を包摂し、他者とともに生きるかは、現代社会が抱えるもっとも切実な課題である。この講義ではこの課題について考える。

Profile

沖縄の出稼ぎとUターンにおけるアイデンティティ、階層格差、インフォーマルな共同性、沖縄戦と所有権の解体、沖縄的規範の歴史的構築などのテーマで、長年にわたり沖縄において個人の人生を聞き取る「生活史調査」を続けてきた。同時に、「個人の語り」そのものについて、理論的な考察を深めている。ここ数年は自らが暮らす大阪を舞台に小説も刊行し、織田作之助賞を受賞した。

広井 良典

京都大学 名誉教授



講義概要

日本は2011年から本格的な人口減少社会となり、現在の出生率が続けば日本の総人口は2050年過ぎには1億人を切り、さらに減少していくことが予測されています。これは人口や経済の規模が拡大を続けるという、明治以降100数十年にわたって続いてきた時代状況からの根本的な変化であり、「拡大・成長」を基調とする社会のあり方からの大きな発想の転換が求められています。まちづくりや地域再生、企業行動や経営のあり方、社会保障や世代間の配分、東京・地方や都市・農村を含む国土のビジョン等々はどのようなものであり、そこでの「豊かさ」や「価値」はどのように展望されるでしょうか。人類の歴史の中での人口減少社会や資本主義のゆくえといった大きな視点も含め、人口減少社会のデザインを幅広い角度から考えてみましょう。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

日本は文字通り世界の「フロントランナー」として、人口減少あるいは超高齢化社会を経験していくことになりました。したがって、このテーマは令和時代の日本にとっての中心に位置する話題であるとともに、日本がどのようなビジョンを描き対応をしていくかは世界にとっても意味があると言えます。こうした問題意識も踏まえ、私たちの研究グループは、「2050年、日本は持続可能か」という問いを立て、日本社会が2050年に向けて持続可能であるためにはどのような対応が必要かという点を、最近関心が高まっているAIを活用して分析し、必要な政策を提言するなどしてきました。同時に、人口減少社会においては人々の意識や価値観、死生観等も大きく変容していくことが予想されます。未来に向けての日本社会の持続可能性にとって、人口減少社会をめぐる研究は最優先のテーマと考えられます。

Profile

1961年岡山市生まれ。1984年東京大学教養学部卒業(科学史・科学哲学専攻)、1986年同大学院修士課程修了後、厚生省勤務(1986～96年)を経て1996年より千葉大学法経学部助教授、2003年同教授。この間、2001～02年MIT 客員研究員。2016年より2025年まで京都大学教授。専攻は公共政策及び科学哲学。「人間についての探求」と「社会に関する構想」を橋渡しすることが基本的な関心で、環境・福祉・経済が調和した「持続可能な福祉社会」を構想。社会保障、医療・福祉、都市・地域等に関する政策研究から、ケア、死生観等に関する哲学的考察まで幅広い活動を行っている。この間、教育再生懇談会委員、国際協力機構(JICA) 社会保障分野課題別支援委員会委員、内閣府・幸福度に関する研究会委員、国土交通省・国土審議会専門委員、内閣府・選択する未来2.0懇談会委員、経済産業省・地域の持続可能な発展に向けた政策の在り方研究会委員等多くの公職を務める。

『日本の社会保障』岩波新書(1999年)でエコノミスト賞、『コミュニティを問いなおす』ちくま新書(2009年)で大仏次郎論壇賞受賞。他の著書に『ケアを問いなおす』ちくま新書(1997年)、『定常型社会 新しい「豊かさ」の構想』岩波新書(2001年)、『死生観を問いなおす』ちくま新書(2001年)、『ポスト資本主義 科学・人間・社会の未来』岩波新書(2015年)、『人口減少社会のデザイン』東洋経済新報社(2019年)、『無と意識の人類史』東洋経済新報社(2021年)、『科学と資本主義の未来』東洋経済新報社(2023年)など多数。

Category
自然科学
01
前期

微生物に無限の可能性を求めて

OGAWA Jun

微生物が未来社会に
いかに貢献できるかを考える

小川 順

京都大学大学院農学研究科 教授



講義概要

これからの地球社会が目指す持続的社會は、健やかな物質循環と、授受関係にある生物間の健全な相互作用が保たれている社会と考えます。地球上に広く存在し多様な物質循環を担う微生物は、この未来社会像の立役者なのです。本講義では、「微生物は我々の健康を支える」、「微生物は生物間相互作用を介して物質循環を駆動する」、「微生物は環境調和型の未来産業を牽引する」の3軸から、微生物の力の活用事例を紹介するとともに、未来社会創造に貢献する微生物の無限の可能性を議論したいと思います。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

人類は、微生物の存在を認識する以前から、その多様な力の恩恵に与ってきました。食における発酵醸造の技術がその良い例でしょう。近代科学により、微生物の物質変換能力が様々な解明される現代、微生物が作り出す分子の多様性によって、食品の健康機能、土壌の肥沃さ、水の美しさがもたらされることが理解されてきています。微生物の能力を理解し、その機能が最大限に発揮される環境を築くことが、ヒト、社会、そして地球の健康を実現し、持続的循環型社会を創造することにつながると考えます。

Profile

1967年滋賀県生まれ徳島県育ち。1990年京都大学農学部農芸化学科卒業。1995年同農学研究科農芸化学専攻博士後期課程修了(博士(農学))。1995年京都大学農学部・助手。2006～2007年フランス国立農業研究所客員研究員。2008年京都大学微生物科学寄附研究部門・特定教授。2009年より京都大学大学院農学研究科・教授(応用生命科学専攻・発酵生理及び醸造学分野)。

研究テーマと抱負として、微生物に多様な機能を探索し、それを社会のために役立てる研究をしたい。趣味は、クラシック音楽(オーボエ演奏・指揮)、酒遊食楽。

2004年農芸化学奨励賞。2006年日本農学進歩賞。2018年食品免疫学会賞。2020年Ching Hou Biotechnology Award (American Oil Chemists' Society)。2021年Chevreul Medal Award 2021 (French Society for the Study of Lipids)。2025年日本農芸化学会賞など。

金出 武雄

カーネギーメロン大学 創始者記念全学教授
京都大学高等研究院 招聘特別教授



講義概要

AIあるいは人工知能という言葉を書かない日はないと言っていいほどのこの頃である。その可能性・実用性は一般にかなり理解されてきたものの、その技術的内容については深層学習・生成AI・シンギュラリティという言葉からの想像を超えない理解、その社会的インパクトについては夢物語から、警戒論・懐疑論、さらには極端な恐怖論までセンセーショナルな議論も時に見受けられる。このあたりについて、講義とディスカッションと、かつ講師の研究生生活から得た発想法を通じて、科学工学的により正確な理解と本質的な議論とを目指したい。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

人工知能は、「ひとが一般に知能的と呼ぶ能力」を人工的に、現在では主にコンピュータによって実現しようとする科学工学の分野で、60年以上まえに提唱され、研究されてきた。いくつかの領域ではすでに、近年の深層学習・生成AIに代表されるような人と同様、時には人以上の能力を持つものが現れている。その社会的インパクトは大きい。新しい機能や産業が人の生活を豊かにし、人の能力自体もその助けを借りて進み、これまで難しかった多くの問題の解決につながると思われる。一方、現在の多くの職業はAIによって置き換わる可能性は明らかであるし、人工知能が創造も含め人を超えたときには「人とは何か」という根源的な問い（一意的な回答はないだろうが）を発していると考えられる。

Profile

人工知能、ロボット、計算機視覚の研究者。1993年京都大学で博士号・助教授の後、1980年カーネギーメロン大学に移籍し、同大学ロボット研究所Directorなど歴任。400以上の論文と155,000回以上の参照数により、h-indexと呼ばれる論文インパクト指標において計算機科学分野TOP10(2020)に入る。主な研究成果は、世界最初の顔画像認識、MPEGなど動画画像処理における最も基本的なアルゴリズムLucas-Kanade法、自動運転による初のアメリカ大陸横断(1995)、第35回スーパーボウルでのロボットカメラによる360度の視野回転のプレー再生システム(2001)など。京都賞、フランクリン財団バウアー賞、米国計算機学会/人工知能学会アレン・ニューウェル賞、米国電気電子学会創始者メダル、スペインBBVA財団知識のフロンティア賞、ジョン・スコット賞など。文化功労者、日本学士院会員。

Category

自然科学

03

前期

フュージョンエネルギー
イノベーションと持続可能性

KONISHI Satoshi

民間主導のフュージョン開発を
展望し、その影響を考察する

小西 哲之

京都フュージョニアリング
代表取締役CEO 兼 Chief Fusioner

講義概要

エネルギーは、資源問題から持続可能性問題へと重心が移った。フュージョンエネルギーは化石資源に代わる新たな候補として、世界的に民間が産業化を目指した開発競争に突入している。20世紀型の官主導の研究開発から、民間スタートアップがリスクを取ってイノベーションを達成する時代に入った世界で、わが国は方向感を見失っている。重要なのはサプライチェーン構築であり、我が国も新産業創生の機会であると同時に世界市場では厳しい競争に直面している。本講義はこの新たなフュージョンエネルギー開発競争の構造を提示し、我が国の勝ち筋と、それが人類の持続可能な未来にどうつながりうるか、を受講生とともに考察することを目的とする。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

科学技術は、新発見や発明自体が直ちに世の中を変えるのではなく、社会構造の変化、例えば新産業の創生に至って初めて人類社会に影響を与える。公的予算による官主導の研究開発の時代は終わり、今やイノベーションは果敢にリスクをとるスタートアップ企業によって起こされ、それを産業化した国や企業が市場の主導権を握る。本講義は新たなエネルギー源と期待されるフュージョン（核融合）開発と民間主体の産業化競争の現状を紹介するとともに、それがどのようなインパクトを起こすのか、エネルギー技術と産業の固有の構造とダイナミズムを分析する。しかしエネルギーは、必ずしも人類の持続可能性を保証するとは限らない。学際的俯瞰的視点で聴講生と考えていきたい。

Profile

1979年東京大学工学部卒、81年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了。東京大学博士（工学）。1981年、日本原子力研究所に入所。同研究所主任研究員及び室長。2003年より京都大学エネルギー理工学研究所教授。2008～2012年8部局による京大生存基盤科学研究ユニット長併任。核融合炉工学、炉設計研究に従事し、国際熱核融合実験炉（ITER）理事会のテストブランケット計画委員会（TMB-PC）議長（2009～2012）及び日本政府代表委員。原子力学会理事。専門はエネルギーシステム評価、サステナビリティ学。核融合、先進原子力等のエネルギーシステムの工学、安全性、環境影響、社会経済評価研究。京大生存基盤科学研究ユニットでは地球環境問題や人類の持続可能な発展を考える学際領域「サステナビリティ学」学際研究に従事。2019年学内発企業「京都フュージョニアリング株式会社」創業、2023年よりCEO。内閣府「イノベーション政策強化推進のための有識者会議「核融合戦略」」委員。

坂口 志文

京都大学名誉教授 大阪大学名誉教授
京都大学ウイルス再生医科学研究所 客員教授
大阪大学免疫学フロンティア研究センター 特任教授



講義概要

免疫系は、私たちの身体を病原微生物から守りますが、身体を作っている正常な細胞、分子とは反応しません。では、免疫系は、自己と非自己をどのように区別しているのでしょうか。この“免疫的自己・非自己”を区別する仕組みが分かれば、自己免疫病やアレルギーの理解が進み、治療・予防が可能になります。また、自己から発生した“自己もどき”である癌細胞に対して強い免疫反応を起こすことが可能となり、移植臓器をあたかも自己臓器として受容させることが可能となるでしょう。私たちと共生している腸内細菌も“自己もどき”であり、健常人では免疫反応が起こりません。免疫反応が起これば炎症性腸炎の原因となります。このような免疫的自己・非自己という概念をもとに新しい免疫医療の現状と展望について講義します。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

日本も含めて先進国では、最近のがん免疫療法の実用化の様に、免疫の潜在能を媒介とした様々な疾患治療法の研究、臨床応用が進んでいます。一方、先進国では感染症をコントロールできる様になり感染症の頻度が下がるに従って、近年自己免疫病、アレルギー、炎症性腸炎などの免疫疾患が増えてきています。衛生的な環境では強い免疫反応を起こす必要がなくなり、免疫系が「鍛えられない」結果、このような免疫疾患が増えてくるのかもしれない。このようなパラドックスを考察しながら、先進国、発展途上国を問わず、医学・医療の未来はどうあるべきか、議論したいと思います。

Profile

1976年京都大学医学部卒業。京大病理、愛知癌センター研究所、京大免疫研究施設を経て1983年医学博士取得。1983年よりJohns Hopkins 大学、Stanford 大学博士研究員(Lucile P. Markey Scholar)、1989年Scripps 研究所、カリフォルニア大学サンディエゴ校 Assistant Professor、1992年科学技術振興事業団「さきがけ」研究専任研究員、1995年東京都老人総合研究所免疫病理部門・部門長、1999年より京都大学再生医科学研究所教授、2007年より同研究所長、2011年4月より大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授、2016年より大阪大学名誉教授、京都大学名誉教授。2004年William B. Corey Award、2008年慶応医学賞、2009年紫綬褒章、2012年学士院賞、同年米国科学アカデミー外国人会員、2015年Canada Gairdner International Award、同年Thomson Reuters 引用栄誉賞、2017年Crafoord Prize、2017年文化功労者、2019年英国Birmingham 大学名誉医学博士、2019年文化勲章、2020年Paul Ehrlich and Ludwig Darmstaedter Prize、その他受賞多数。2016～2018年日本免疫学会理事長。

Category

自然科学

05

前期

子どものがんを深く知る

TAKITA Junko

子どものがんを克服するための
挑戦と未来図

滝田 順子

京都大学大学院医学研究科発達小児科 教授



講義概要

小児期に発症するがんの本邦における発生率は、年間約2,500人であり、成人がんと比較すると極めて稀である。しかし、小児がんは、本邦において小児期の主要な死亡原因となっている。従って、小児がんの克服は、少子高齢化が進行する本邦において、早急に取り組むべき重要課題と言える。小児がんの中でもとりわけ遠隔転移や再発を来す例は依然として予後不良であり、有効な治療法は確立されていない。これらの難治例に対して現時点では、救命が最優先事項であり、強力な治療がなされているが、救命しえたとしても重篤な晩期合併症が深刻な問題となっている。希少疾患ゆえに認知度が低い小児がんの現状、課題、克服のために進められている研究について概説する。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

現在、国内の小児がんサバイバーは5万人に達すると推計されており、今後増加することが見込まれている。小児がんサバイバーが増加するにつれ、QOLを著しく損なう晩期合併症が深刻な社会問題となっている。これらのがんサバイバーは、複数科の定期的な受診がほぼ一生必要であり、一人当たりの医療費は健康な国民と比較すると膨大な額にのぼる。小児がんに対して分子病態に立脚した合理的な治療法の開発がなされれば、重篤な晩期合併症の回避をもたらし、医療費削減が期待できる。単に小児がんの治療成績の向上のみならず、がんサバイバーのQOL向上をももたらし、健全な若年者の育成、ひいては生産人口の増生につながり、社会福祉の向上に与えるインパクトは大きい。

Profile

1991年日本医科大学医学部卒業。同年、東京大学医学部小児科入局。1992年焼津市立総合病小児科医員。1993年国立がん研究センター研究所生物学部リサーチレジデントに就任後、小児がんの基礎研究に着手。1996年東京都立駒込病院小児科医員。2000年東京大学医学部附属病院小児科医員、2003年同助手、2005年同無菌治療部講師。臨床の傍ら、基礎研究を継続し、小児固形腫瘍の代表である神経芽腫におけるALKの異常を発見する(Takita et al., Nature, 2008)。2013年東京大学大学院医学系研究科小児科准教授、2018年京都大学大学院医学研究科発達小児科教授に就任し、現在に至る。東京大学医師会賞、日本小児科学会研究学術賞、日本癌学会 JCA-Mauverney Award、JCA女性科学者賞など受賞。

Category
自然科学
06
前期

宇宙を支配する数式

HASHIMOTO Koji

宇宙のすべてを解き明かす素粒子物理学、
その現状と課題、超ひも理論へ。

橋本 幸士

京都大学大学院理学研究科 教授



講義概要

この宇宙、そして物質と力、は究極のところ、何からできているのでしょうか。我々人類は、素粒子物理学を用いて、この宇宙がたった一つの数式で支配されていることを突き止めました。この数式は、素粒子の標準模型(にアインシュタインの一般相対性理論を加えたもの)と呼ばれ、人類の英知の結晶です。本講座では、この数式をまず書いてみることから始め、数式のそれぞれの項の意味、そしてその意義を解説します。また、暗黒物質やニュートリノ振動現象など、数式では説明しきれない宇宙の謎についても述べます。これらを解決するのは、「素粒子が小さなひもである」という仮説「超ひも理論」なのでしょう。まだ、宇宙を支配する数式は、完成していないのです。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

素粒子物理学が明らかにした、極微の世界を記述する量子力学、そして極大の宇宙を記述する相対性理論、これらは100年前に作られ、現在の電子機器や衛星宇宙技術などの基盤として人間の生活を支えています。役に立つまで1世紀かかる研究は、自分の人生という尺度では測れない普遍的な価値を生むものです。素粒子物理学は、世界の成り立ちを知る学問であり、現在人類が到達した最高地点の科学です。これを知った人は、世界を見る方法じたいが変わるでしょう。

Profile

理論物理学者。1973年生まれ、大阪育ち。2000年京都大学大学院理学研究科修士、理学博士。2000年サンタバーバラ理論物理学研究所研究員、2001年東京大学助手、2010年理化学研究所准主任研究員(橋本数理論物理学研究室主宰)、2012年大阪大学教授などを経て、2021年より現職。専門は理論物理学、素粒子論、超ひも理論。世界各国で100以上の招待講演、現在は湯川秀樹が拓いた研究室の後任教授として教鞭を取る。日本物理学会理事。執筆教科書に『Dブレーン:超弦理論の高次元物体が描く世界像』(東京大学出版会)、共著に『ディープラーニングと物理学』(講談社)など。一般向け著書に『物理学者のすごい思考法』(集英社)、『超ひも理論をババに習ってみた』『「宇宙のすべてを支配する数式」をババに習ってみた』(講談社)など。季刊『kotoba』にエッセイを連載中。サイエンスとアートをつなぐ活動を行い、出演したパフォーマンスアート作品“Every day is a new beginning”で Art Innovation 2019国際会議にて京都大学総長賞を受賞。

Category

自然科学

07

前期

〈からまりしろ〉としての建築

HIRATA Akihisa

生命のような建築を
つくることは可能か

平田 晃久

建築家

京都大学大学院工学研究科 建築学専攻 教授



(c)Luca Gabino

講義概要

かつて昆虫少年だった私は、昆虫たちが生きている自然環境と、自分たちが生活している建物の空間がどうしてこんなに違うのだろう、と思っていました。建築はもっと自然環境のような質を獲得できるはずであり、人間たちは自らの動物的本能を呼び覚まされるような都市・建築環境の中で、もっと生き生きと活動できるはずなのです。建築を自然と対立する人工物としてではなく、生態系の一部として根本的にとらえなおすこと。〈からまりしろ〉(=からまる余地[しろ])はそんな建築のための造語です。一本の樹木に鳥たちがからまるように、人間が自らの場所を見出せる、〈からまりしろ〉としての建築がつくれないか。そんな問いから生まれた様々な建築の実践を紹介したいと思います。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

〈からまりしろ〉の概念は、均質でコントロール可能な「空間」を標榜してきた前世紀的な建築を越え、より立体的で自然環境のような質を持った建築や都市環境が生まれるための理論的支柱です。

それは、第一義的には従来と異なる三次元的で自然的要素とからまり合う新しい建築形態とつながります。また、市民ワークショップを通じてつくった公共建築などの実践において、様々な人々の思いとからまり合う建築も生まれつつあります。

人間の精神は自らをとりまく環境と互いに映し合い影響し合います。生態系とからみ合う新しい社会は、建築や都市環境の新たな発展と共にあり、〈からまりしろ〉の建築はそのような発展に寄与するものと信じます。

Profile

1971年大阪府に生まれる。1997年京都大学大学院工学研究科修了。伊東豊雄建築設計事務所勤務の後、2005年平田晃久建築設計事務所を設立。現在、京都大学教授、2025年イエール大学客員教授。

主な作品に「樹屋本店」(2006)、「sarugaku」(2008)、「Bloomberg Pavilion」(2011)、「kotoriku」(2014)、「太田市美術館・図書館」(2017)、「八代市民俗伝統芸能伝承館」(2021)、「ハラカド(ファサード、屋上デザイン)」(小千谷市ひとまち文化共創拠点ホントカ。)(2024)等。第19回JIA新人賞(2008)、第13回ベネチアビエンナーレ国際建築展金獅子賞(2012、伊東豊雄・畠山直哉・他2名との共働受賞)、LANXESSカラーコンクリートアワード(2015)、村野藤吾賞(2018)、BCS賞(2018)、日本建築学会賞(2022)等多数受賞。著書に「人間の波打ちざわ」(青幻舎)、「Discovering New」(TOTO出版)等。また、パウハウス(ドイツ)、ハーバード大学(アメリカ合衆国)、Architecture Foundation(イギリス)等で講演。そのほか、東京、ロンドン、ベルギーなどで個展、MoMAにて「A Japanese Constellation」展(2016)を合同で開催、練馬区立美術館「平田晃久—人間の波打ちざわ」展(2024年7月28〜9月23日)を開催。ミラノサローネ、アートバーゼル等にも多数出展している。

小胞体ストレス応答

MORI Kazutoshi

私たちの細胞が持っている驚異の復元力

森 和俊

京都大学高等研究院 特別教授



講義概要

生き物の基本単位は細胞で、その中に存在する最重要物質は、DNA(遺伝物質)とタンパク質(生命活動の担い手)です。生命活動の基本はDNA に書き込まれた暗号を解読してタンパク質を正しく作りつづけることと言っても過言ではありません。また、体内には多数の臓器が存在する様に、細胞の中には小さな臓器(細胞内小器官)が多数存在し、役割分担しています。小胞体は細胞内小器官の一つで、タンパク質の製造工場という役割を果たします。この工場はかなり優秀ですが、それでも時にうまく機能しなくなり、不良品タンパク質がいつも以上にできてしまうことがあります。この状態を小胞体ストレスと呼んでいます。この悪くなった状況を元に戻そうとする細胞の復元力(小胞体ストレス応答)の仕組みと意義をお話します。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

小胞体ストレス応答は、生命活動の担い手であるタンパク質の立体構造を保証することによって、様々な生命現象や生物進化を裏から支えていることが明らかになってきました。小胞体ストレス応答が働かないと私達は生まれてくることさえできません。小胞体ストレスもしくは小胞体ストレス応答が様々な病気の発症や進展に関与すると考えられています。糖尿病、アテローム性動脈硬化、パーキンソン病や筋萎縮性側索硬化症などの神経変性疾患、心不全や心筋症、肥満や代謝性疾患、炎症性腸炎、がんやウイルス感染等です。私達基礎研究者が解明した仕組みを使った創薬が始まっています。この応答は老化にも関与しており、健康寿命を延ばすことができるようになるかもしれません。

Profile

1958年岡山県倉敷市生まれ。1981年京都大学薬学部卒業。1983年京都大学大学院薬学研究科修士課程修了。1985年京都大学大学院薬学研究科博士課程退学。1987年京都大学薬学博士。1985年岐阜薬科大学助手、1989年米国テキサス大学博士研究員。1993年エイチ・エス・ピー研究所副主任研究員・主任研究員。1999年京都大学大学院生命科学研究科助教授。2003年京都大学大学院理学研究科教授。2024年より京都大学高等研究院特別教授。小胞体ストレス応答研究の開拓者として、2005年米国ワイリー賞、2006年日本生化学会柿内三郎記念賞、2008年大阪科学賞、2009年カナダガードナー国際賞、2010年紫綬褒章、2012年上原賞、2014年朝日賞、アルバート・ラスカー基礎医学研究賞、香港ショウ賞、2015年トムソン・ロイター引用栄誉賞、2016年恩賜賞・日本学士院賞、2017年ブレークスルー賞、2018年文化功労者、2019年安藤百福賞大賞、2023年慶応医学賞、2024年Frontiers of Knowledge Award。

Category

自然科学

09

前期

人類の進化と文化のミスマッチ

YAMAGIWA Junichi

人類の進化史と文明史を遡り、
どこで間違ったかを探り当て、
未来社会を展望する

山極 壽一

総合地球環境学研究所 所長
京都大学 名誉教授
前京都大学 総長

講義概要

現代は人新世と言われ、地球環境が大きく破壊される危機の中でこれまでとは全く違った暮らし(ニューノーマル)を組み立てねばならないと考えられている。そのためには、人類の歴史を有史以前に遡り、生物としての進化史を類人猿と比べ、人類がどのような心身の変化を経験して現代に至ったかを概観する必要がある。その上で、農耕・牧畜開始以来の文明史の中で人類が道を踏み外したと思われる点を探し出し、情報通信機器が急速に発達し、超スマート社会を迎えるなかで人間の心身と人工的な環境との間でどんなミスマッチがあるかを考察する。さらに、10年後、30年後の未来にふさわしい幸福な社会とは何かを考えてみることにする。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

今、人間の歴史を見直す作業に注目が集まっている。それは人間と社会がどのようにできたのか、これからどのように行っていくかについて信頼できる見取り図が描けないからである。さらに地球の平均気温の上昇によって自然災害が頻発し、カーボンニュートラルやSDGsなど地球規模で待ったなしの対策が迫られている。そこで、人間の歴史を有史以前に引き伸ばして考えることによって、人間と社会の本質を明らかにし、人間にとって真の幸福とは何かを問うことにする。それは、未来社会を具体的に構想するうえで大きな一助になるだろう。

Profile

1952年東京都生まれ。京都大学理学部卒、同大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学。理学博士。ルワンダ共和国カリソケ研究センター客員研究員、日本モンキーセンター研究員、京都大学霊長類研究所助手、京都大学大学院理学研究科助教授、同教授、同研究科長・理学部長を経て、2020年まで第26代京都大学総長。人類進化論専攻。屋久島で野生ニホンザル、アフリカ各地で野生ゴリラの社会生態学的研究に従事。日本霊長類学会会長、国際霊長類学会会長、日本学術会議会長、総合科学技術・イノベーション会議議員を歴任。

現在、総合地球環境学研究所 所長、2025年国際博覧会(大阪・関西万博)シニアアドバイザーを務める。南方熊楠賞、アカデミア賞受賞。

著書に『人生で大事なことはみんなゴリラから教わった』家の光協会(2020年)、『スマホを捨てたい子どもたち-野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』ポプラ新書(2020年)、『京大というジャングルでゴリラ学者が考えたこと』朝日新書(2021年)、『猿声人語』青土社(2022年)、『動物たちは何をしゃべっているのか?』集英社(2023年共著)、『共感革命-社交する人類の進化と未来』河出新書(2023年)、『森の声、ゴリラの目-人類の本質を未来につなぐ』小学館新書(2024年)、『争いばかりの人間たちへ ゴリラの国から』毎日新聞出版(2024年)など多数。

脳の暗号を解読する

KAMITANI Yukiyasu

他者から見える世界を知ることができるか

神谷 之康

京都大学大学院情報学研究科 教授



講義概要

われわれは外界からの入力がなくとも想起したり夢を見たりすることができます。見ている世界も、外界の単なるコピーではなく、主観に彩られています。脳は、外界を独特な仕方でも内在化した世界のモデル(ニューロバース)を構築しており、脳信号はニューロバースをコード化している「暗号」とみなすことができます。私の研究室では、脳信号パターンから心に関するさまざまな情報を解読(デコード)する方法を開発してきました。本講義では、ニューロバースの外在化・共有化という観点から脳情報解読研究を俯瞰し、脳科学が生み出す未来を展望したいと思います。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

インターネットやスマートフォンなど新たな情報通信技術が、多様なコミュニケーションを可能にしました。しかし、超えられていない壁があります。それは「身体」です。われわれが情報を発信するとき身体(筋肉)を動かす必要がありますが、筋肉とつながっている脳部位はごく一部です。その限られたチャンネルを通して、脳は世界とつながっているのです。しかし、脳情報解読技術は、そのボトルネックを超える脳と世界のブロードバンド通信を実現します。これによって、他人が経験している世界を可視化し、共有することができるようになるかもしれません。また、自分自身も意識していない、覚えていない情報を解読することにより、自己の深層を知る手がかりが得られるかもしれません。このような技術は、人間の文明や文化にどのような影響を与えるでしょうか。

Profile

奈良県生まれ。東京大学教養学部卒業。カリフォルニア工科大学でPh.D.取得後、ハーバード大学、プリンストン大学、ATR脳情報研究所を経て、2015年から現職。機械学習を用いて脳信号を解読する「ブレイン・デコーディング」法を開発し、ヒトの脳活動パターンから視覚イメージや夢を解読することに初めて成功した。SCIENTIFIC AMERICAN誌「科学技術に貢献した50人」(2005年)、塚原伸晃賞(2013年)、日本学術振興会賞(2014年)、大阪科学賞(2015年)等を受賞。2018年、ATRフェローの称号を授与される。サーベントイン・ギャラリー(ロンドン)でのピエール・ユイグの展示「Umwelt」(2018年)のための映像を提供するなど、アーティストとのコラボレーションも進めている。

Category

複合領域

02

前期

現代史概論

FUJIHARA Tatsushi

20世紀を多角的にとらえる

藤原 辰史

京都大学人文科学研究所 准教授



講義概要

参加者には事前に、『〇〇の20世紀』という新書を書くとしたら、どんなタイトル&副題にし、どんな内容にするか、考えてもらい、それを発表いただいた上で、20世紀の輪郭を掴んでいきます。

私はいつも現代史講義を学生へのこんな質問から始めています。自分が歴史をかくと言う意識を明確にすることで、多角的に、かつ生活の延長として歴史をとらえる方法を考えてみたいと思います。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

この研究は、高校までの社会で学んだ歴史を、もっと深く、広く、自分の関心の延長として捉えるものです。そのような教養を身につけることで、中東や東欧、南米など「遠い」地域で起こる問題を自分の問題として考え、地球規模の思考をすることが可能になり、それが、世界を単なる「マーケット」や「資源のありか」としてしか捉えられない貧しい世界観を変えることにつながります。

Profile

1976年生まれ、2002年京都大学人間・環境学研究科中退、同年、京都大学人文科学研究所助手、東京大学農学生命科学研究科講師を経て、2021年4月より京都大学人文科学研究所准教授。2017年には日本学術振興会賞もを受賞。2017年には日本学術振興会賞もを受賞。

主な著作に『ナチスのキッチン』共和国、河合隼雄学芸賞(2016年)、『分解の哲学』青土社、サントリー学芸賞(2019年)、『緑食論』ミシマ社(2020年)、『農の原理の史的研究』創元社(2021年)など。

Category
複合領域

03

前期

ヒトの脳と心(人間らしさ)の 創発・発達

MYOWA Masako

次世代人類が生きる環境、
社会について考える

明和 政子

京都大学大学院教育学研究科 教授



講義概要

ヒトを含む生物は、身体を持っています。身体には物理的制約があります。身体が環境に能動的にふるまう過程で、膨大な量の情報はその制約に基づきふるまいにかけられます。情報は、身体をもつその個体にとって「意味あるもの」が選択、構造化されることで、ヒト特有の形質(脳や心)は創発・発達していきます。さらに、個の発達は周囲の社会、文化の形成に影響を与え、それが次世代の形質を創発、発達させる制約そのものとなります。つまり、生物としてのヒトの脳と心が創発、発達する原理、機序を十分理解しないまま、環境や社会を変革することは、ホモ・サピエンスの未来を左右することでもあるのです。「ヒトとは何か」という基本的理解を軸に、次世代人類が育つ環境、社会について考えてみましょう。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

日本では、サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたSociety 5.0が目指されています。新型コロナウイルス感染症の拡大が、この流れを一気に加速させました。Society 5.0では、利便性の向上、省力化(無駄のなさ)に価値がおかれています。しかし、これは完成した脳をもつ大人の脳と心の働きを前提にしているにすぎません。哺乳類動物の一種であるヒトは、他個体との「密・接触」を基本とする環境に適応して進化してきた生物です。大人にとっては一見無駄にもみえる環境、社会で様々な経験を積み重ねながら、ヒトの脳と心(人間らしさ)はゆっくり育まれていくのです。今、私たちが生きる社会、環境は未曾有のスケールで変化しています。今後、どのような未来を次世代人類に託していくべきなのか。皆さんとともに議論したいと思います。

Profile

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士(教育学)。京都大学霊長類研究所研究員、京都大学大学院教育学研究科准教授などを経て、現在同教授。日本学会議会員、文部科学省科学技術・学術審議会委員、こども家庭庁幼児期までのこどもの育ち部会委員。ヒトとヒト以外の霊長類を胎児期から比較し、ヒト特有の脳と心の発達とその進化的基盤を明らかにする「比較認知発達科学」を世界にさがけて開拓した。近著に「マスク社会が危ない—子どもの発達に「毎日マスク」はどう影響するか? (宝島新書)」『ヒトの発達の謎を解く—胎児期から人類の未来まで (ちくま新書)」『まねが育むヒトの心 (岩波ジュニア新書)」など。NHKスペシャル「ママたちが非常事態!? 最新科学で迫るニッポンの子育て1・2 (2016年放送)」『ニッポンの家族が非常事態!? わが子がキレる本当のワケ (2017年放送)」『ジェンダーサイエンス 男X女 性差の真実 (2021年放送) 等の監修・出演により、現代社会に生きるヒトが抱える問題を最新科学から理解する活動にも力を注いでいる。

Category

文化・芸術

01

前期

日本舞踊の美しさの本質

UTSUGI Annia

誰もが美しいと感じるものに宿る
本質的法則に迫る

宇津木 安来

日本舞踊家
日本舞踊研究者
株式会社アートチューンズ代表

講義概要

絶対音感なぜ「絶対」なのか、自然を誰もが美しいと感じるのはなぜなのか、ハイパフォーマンスのスポーツ選手は何が違うのか、踊りが上手い人はなぜいつも踊りがうまいのか、天才はなぜいつも天才なのか…。圧倒的なパフォーマンスや常に人が美しいと感じるものの裏には必ず法則があります。

日本舞踊は文化それ自体として底知れない美しさを秘めており、またその文化を人間の身体で表現することで生きる芸術としての美しさを感じさせることができる豊かさと奥深さをもった文化です。その魅力を、踊ることによって身体で伝えられるようにすることはもちろん生涯の目標ではありますが、一方で、言葉を通して明確に伝えていくこともまた一つの使命だと考えています。

日本舞踊という一つの分野の魅力を、身体を通して、論理を通して、認識と体感の両方から体験することで、それぞれの人生やそれぞれの分野に対する認識にもまた還元できるのではないかと考えています。



Profile

0歳～5歳まで5年間を幼少期をアメリカで過ごす。3歳でペンシルヴァニア・バレエ団に入団。5歳で東京ロシア・バレエ団に入団。11歳より日本舞踊を始め、16歳で宗家藤間名執資格修得。19歳で宗家藤間流師範資格修得。20歳より身体運動研究家・実践家として、運動科学者・武術家 高岡英夫師に師事。

2008年～2012年東京藝術大学音楽学部邦楽科日本舞踊専攻卒業。2012年～2014年東京藝術大学大学院音楽研究科邦楽専攻日本舞踊研究領域 修士課程修了。修士号取得。修士論文の研究テーマは、「日本舞踊における記号学的構造—ソシール記号学を用いて—」。2015年～2019年東京藝術大学大学院音楽研究科邦楽専攻日本舞踊研究領域 博士課程修了。博士号取得。博士論文の研究テーマは、「日本舞踊における「体幹部」の技法分析および基礎練習法の提案—モーションキャプチャシステムを用いて—」。

2019年～2022年東京藝術大学COI拠点特任助手を経て特任研究員。「アートの社会実装および事業化」を最終目標とする産学官連携プロジェクトに、アーティスト・研究者およびプロジェクト推進・運営・連携業務で中心に関わる。

2022年9月～現在、artTunes設立。現在、東京藝術大学専門研究員、東京大学先端科学技術研究センター客員研究員。運動科学総合研究所芸術研究員。

<https://www.annia-u.com/>

Category

文化・芸術

02

前期

書へのいざない

KUJSEKO Hakuju

東洋芸術の第二であった書の過去・現在・未来

杭迫 柏樹

日展 名誉会員

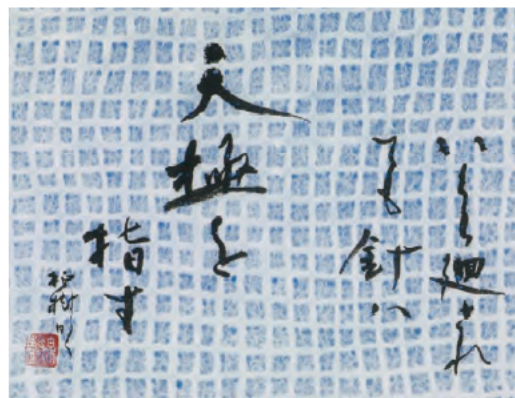


講義概要

1、理論

- A 書道史
- B 書 論
- C 過去・現在・そして未来を考える

2、実技 座右の銘を書く



Profile

1934年生。京都学芸大学美術科(書専攻)卒。日展名誉会員、日本書芸院名誉顧問、現代書道二十人展メンバー(2023年まで16年間)。2005年日展内閣総理大臣賞、2008年日本藝術院賞、2012年京都市文化功労者顕彰、2021年京都府文化特別功労賞、2021年旭日小授章。

主なパブリックコレクションに、メトロポリタン美術館(USA)ボール・コレクション(スイス)、上海博物館(中国)、王羲之墓(中国)、各国日本文化会館・文化交流館、各国日本大使館・総領事館、日本藝術院、日展会館、成田山書道美術館、首相官邸、全国著名社寺ほか多数。

Category

文化・芸術

03

前期

茶の湯は日本のポータルサイト

SEN Soshitsu

千 宗室

茶道裏千家 家元



講義概要

茶の湯は間口が広く、奥行きの深い文化です。

まず、お茶を点てるということ。次に道具組みや菓子、料理に込めるもてなしの心や、花を入れ、炭を継ぎ、香を^た炷く工夫があります。禅との関わりや、書画、陶芸など工芸の数々。数寄屋建築、造園。礼法もあり、二十四節気など季節の移ろいを身近に感じる場です。この様に多彩な文化の詰まった茶道は「日本文化のポータルサイト」だと私は考えています。

茶の湯の根本には「日々是好日」の精神が流れています。その思いは、先ず千利休居士がお茶というものに対処していく姿ににじみ出ており、それを受け取った後の世の人たちの間で茶の湯に欠かせぬものであると心から心へと伝えられてきました。ですから、特別な覚悟はなくても五感を通して感じるものすべてを、そのときそのとき素直に受け入れる心があれば、私たちは「一期一会というサイクル」の中で日々を送っていくことができるわけです。

「和敬清寂」の語で示される利休居士の茶の湯の根本は今日に至るまで不変です。しかし、それはいたずらに古いかたちを踏襲しているわけではありません。各時代に生きる人々が「そのときの今」に合う茶の湯のすがたを常にアップデートしてきた証です。

この体験を通じ、少しでも茶道を身近に感じていただければ願っております。



Profile

京都府出身。同志社大学卒業。臨済宗大徳寺管長・僧堂師家 中村祖順老師のもとで参禅得度。祖順老師没後、大珠院 盛永宗興老師のもとで参禅。平成14年、裏千家16代家元継承。

京都芸術センター館長、(学)立命館理事、(財)松下政経塾理事、日本感情心理学会理事、(社)日本YPO (Young Presidents' Organization) 会長、(社)京都青年会議所理事長、(社)日本青年会議所近畿地区協議会会長、日本JCシニア・クラブ筆頭世話人代表、等を歴任。

現在、(公財)京都文化交流コンベンションビューロー副理事長、(公財)稲盛財団理事、同志社大学客員教授、京都陸上競技協会顧問、(公財)生涯学習かめわか財団理事長、大阪・関西万博日本館政府出展事業検討会議検討委員、(公社)2025年日本国際博覧会協会シニアアドバイザー、大阪・関西万博きょうと推進委員会委員 等をつとめる。

Category

人文科学

01

後期

異文化理解こそが
次世代社会の条件

Oussouby SACKO

グローバル化のなかの多様性と文化の役割を考える

ウスビ サコ

京都精華大学 前学長
人間環境デザインプログラム/
デザイン研究科(建築専攻) 教授

講義概要

グローバル化が急速に進むなかで、かつての文化的規範や国民国家という枠組みは揺らぎ始めています。これまでの共同体は解体され、個が中心となる社会が形成されます。いわゆる「ジャパニスタンダード」や「ジャパニシステム」が崩れ、物事の価値判断は一国のルールや政策では決めることができなくなります。グローバル化によって変化した社会基盤は個を大切に、個人は因襲的な束縛から解放されます。そこでは、人種、性別、宗教、性的指向、社会経済的背景、および民族性などを超えて、個と個が互いの違いを認め合うことが重要になります。異文化を受け入れることが苦手な日本人にとっては、あらたな、そして大きな不安となることでしょう。本講義では、グローバル化する社会の中で人間はどう生きべきか、多様性と文化の役割について考えます。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

多様なバックグラウンドや属性を持つ人々が違いを受容し合うことがグローバル化される社会で生きる条件となります。世界中の人びとが集まるなかでは、多様性を大切にする必要があります。本講義と研修を通して、多様な文化と価値観を受容するとともに自己の文化を見つめ直し、そして新しい文化と社会を創造する力を身につけてもらいます。いつの時代にも世界にはさまざまな問題があふれていますが、わたしたちには明るい未来を作り上げるために、世界の多様性を知ることと異文化を理解する必要があります。特に、「個々が自分の立ち位置」をしっかりと決め、「ブレない軸」を持つことが次世代の社会の中で生きる条件となります。本講義で獲得できる「知識」は、個々の受講生がこれから生きていくうえで大きな力となることを確信しています。

Profile

1966年マリ共和国に生まれる。高校卒業と同時に国の奨学金を得て中国に留学。北京語言学院（現・北京語言大学）、南京市の東南大学等に6年間滞在して建築学を実践的に学ぶ。1990年東京で短期のホームステイを経験し、アフリカに共通するような下町の文化に驚く。

1991年3月に来日し、同年9月から京都大学大学院で建築計画を学ぶ。博士号取得後も日本学術振興会特別研究員として京都大学に残り、2001年に京都精華大学人文学部教員に着任。2013年には学部長。2018年4月同大学学長就任（～2022年3月）。現在の専門は空間人類学。

『知のリテラシー・文化』ナカニシヤ出版（2007年 編著）、『現代アフリカ文化の今』青幻舎（2020年 編著）、『「これからの世界」を生きる君に伝えたいこと』大和書房（2020年）、『アフリカ出身 サコ学長、日本を語る』朝日新聞出版（2020年）、『アフリカ人学長、京都修行中』文藝春秋（2021年）、『ウスビ・サコの「まだ、空気読めません」』世界思想社（2021）。

Category

人文科学

02

後期

最後の空果てて後
鳥たちは何処を飛ぶ

OKA Mari

ガザのジェノサイドと人間であることの意味

岡 真理

早稲田大学文学学術院 教授



講義概要

2007年に封鎖され「世界最大の野外監獄」と呼ばれるパレスチナ Gaza 地区は、一昨年(2023年)10月7日以降、イスラエルによるすさまじいジェノサイド攻撃にさらされ、今や21世紀の絶滅収容所と化しています。その破壊と殺戮の規模を見れば、それが、イスラエルの言う「ハマースの殲滅」などのためではなく、ガザの人々とガザにおけるパレスチナ人の共同体そのものの壊滅を企図していることが分かります。なぜ、ガザは、こうした破壊と殺戮に繰り返し見舞われるのか。20世紀のホロコーストを経験したこの世界で、何が、このような大量殺戮を可能としているのか。国際政治の観点からではなく、人文学的視点から考えます。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

イスラエルによるガザのジェノサイドは、日本をはじめとする「西側」諸国では、10月7日のハマースによるテロ攻撃を起点とする、イスラエルの「自衛の戦争」と位置付けられています。しかし、そのような歴史性を欠いた解釈に立脚している限り、私たちはこの暴力の根源とは何かを正しく知ることができず、問題を真に解決することもできません。ガザとは何か、パレスチナとは何か、イスラエルとは何かを正しく知ることを通して、私たちは、日本社会のあり方、現代世界のあり方そのものを批判的に問い直し、この地上のすべての人々が「恐怖と欠乏を免れ、平和のうちに生きる」ことができる、そのような世界の実現に向けて努力することこそ、私たち一人ひとりに課せられた人間としての責務があることに気づくでしょう。

Profile

専門は現代アラブ文学、パレスチナ問題。東京外国大学アラビア語科卒業、同大学院修士課程修了。エジプト・カイロ大学留学、在モロッコ日本国大使館専門調査員、京都大学人間・環境学研究院教授等を経て現職(京都大学名誉教授)。学生時代に、パレスチナ作家ガッサーン・カナファニーの小説作品を通して、パレスチナ問題とアラブ文学に出会い、以来、現代世界を生きる人間の普遍的思想課題としてパレスチナ問題を考究している。

著書に、『記憶/物語』岩波書店(2000年)、『彼女の「正しい」名前とは何か』青土社(2019年)、『棗椰子の木陰で——第三世界フェミニズムと文学の力』青土社(2022年)、『アラブ、折りとしての文学』みすず書房(2015年)、『ガザに地下鉄が走る日』みすず書房(2018年)、『ガザとは何か』大和書房(2023年)ほか。訳書に、サラ・ロイ『なぜガザなのか』共訳、青土社(2024年)、ターハル・ベンジェッラーン『火によって』以文社(2012年)ほか。

Category

人文科学

03

後期

ウクライナとパレスチナを結ぶもの ——歴史のなかで考える

Koyama Tetsu

現代の問題を考える
時空間を問い直す

小山 哲

京都大学大学院文学研究科 教授



講義概要

メディアで接するロシア・ウクライナ戦争やガザでの戦争についての解説は、現在の国際関係や軍事上の同盟・対立関係にもとづいて説明されることが多い。しかし、時間の幅を長くとって歴史的な文脈をふまえてとらえ直すと、現在進行中の紛争についても、異なる次元の関係性や問題の広がりが見えてくることがある。この講義では、バルト海と黒海のあいだに広がる地域の歴史に焦点を合わせながら、ウクライナとパレスチナの歴史がどのように結びついているかを考えてみたい。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

歴史学の視点からみると、国際関係論や軍事研究の文脈では見えにくい問題のつながりが浮かびあがってくる。また、紛争を生み出している要因を歴史的な文脈のなかに位置づけて考えることによって、空間的に離れたところで起こっている紛争が、日本の過去の歴史や現在の状況とも無関係ではないことを認識することができる。歴史学は、人間の過去の歩みを探求する学問であると同時に、私たちが生きる現在についてより深く理解するための学問でもある。

Profile

1961年生まれ。歴史学者。京都大学大学院文学研究科教授。専門は西洋史、特にポーランド史。主な著書・共編著に『ワルシャワ連盟協約（一五七三年）』『中学生から知りたいウクライナのこと』『中学生から知りたいパレスチナのこと』『大学で学ぶ西洋史（近現代）』『人文学への接近法』。

Category

人文科学

04

後期

人新世 (Anthropocene) を生きる

SUZUKI Shoko

科学技術のELSIと人間の使命

鈴木 晶子

京都大学 名誉教授
国際高等研究所 主席研究員
理化学研究所 客員主管研究員



講義概要

技術文明を享受するだけでなく、その創造の担い手として人類がこれまで歩んできた文明化の過程を科学哲学・教育哲学の観点から掘り下げ、AI技術をはじめとする新たな技術文明の課題に焦点を当てる。技術文明への適応過程で、自らの能力や技能を更新し続ける人間の可能性と限界とは何か。また、18世紀以来の近代啓蒙の時代に構築された近代社会システムにおいてこれまで自明とされてきた基本的事柄は今後どのように変容していくか。本講義では、人新世(Anthropocene)を生きる人間にとって、環境、エネルギー、ゲノム、AIなど将来の世代を展望した長期的責任体系のもとでの技術文明の課題について、その基本的論点を取り上げ、受講生と議論できればと考えている。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

大きな変革期には、動物や機械との比較を通して、人間とは何か、また何を目指して生きるべきか、生きることの意味を問う哲学に再び光が当たり始めている。技術文明の急速な進展にともなう不確実性を制御するために、科学技術をめぐる倫理的・法的・社会的課題(Ethical-Legal-Social-Issues: ELSI)の検討が喫緊の課題となっている。こうした法や倫理の標準化を目指す国際的議論とその社会実装における文化や宗教、習俗の多様性の尊重、イノベーションとレギュレーションの二項対立を乗り越える道を問うこと、その問いの質を上げていくことは、産官学いずれの領域においても「専門家としての私」と「世の一隅を照らす私人としての私」を統合していく要となるだろう。

Profile

専門は科学哲学、教育哲学、歴史人類学。伝統的なわざの修練にみる触覚知性や直観の働きの哲学的・歴史人類学的解明を通して、新たな学習論の構築に取り組んできた。2016年より理化学研究所革新知能統合研究センターで人工知能の倫理的、法的、社会的影響について研究プロジェクトを主宰。AI時代の技術文明のあり方や倫理について、OECDやユネスコでの議論に参加。総務省情報通信政策研究所特別研究員、総務省AIネットワーク社会推進会議幹事。ベルリン自由大学客員教授(2009-2010)。日本学術会議会員(2005-2014)、同連携会員(2014-2020)。

DWIIH Coffee Talk #6 「AIと倫理」 - YouTube

DAAD/DWIIH記事 <https://www.dwih-tokyo.org/ja/2021/07/14/connecting-east-and-west-3/>

ユネスコAI円卓会議Shaping the Future of AI through Cultural Diversity - YouTube

松山 大耕

妙心寺退蔵院 副住職



講義概要

禅の本質は「不立文字」。つまり、物事の本質は言葉では表現できない、伝えることができない、ということだ。実践体験を通して、核心を伝えていく。禅は単なる瞑想の手段ではない。「行住坐臥」寝ているときも、歩いているときも、すべての瞬間が禅である。ひとつの生き方と言ってもよい。今回の講義では、文字では表現できないと言われる禅の本質をあえて言葉を使って表現しながら、その奥深さを味わうための入り口としたい。坐禅の実践とともに、禅が生み出した庭や茶など日本文化の精神性にも触れ、禅がいかに日本文化に影響を与えてきたかということも感じていただきたい。また、歴史上さまざまなリーダーが禅に影響を受けており、禅の教えとリーダーシップの関係にも注目する。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

いまや禅は日本だけではなく世界中で広く親しまれている。しかし、日本の禅と今、世界で流行しているマインドフルネスやZENとは違いもある。一番大きな違いは、日本の禅は功利主義的な思考をしない、ということだ。マインドフルネスをすれば、パフォーマンスが上がるのではない、ZENを実践すれば健康的な生活が過ごせるのではない。確かにそういう「ご利益」はあるかもしれないが、あくまでそれは「おまけ」であって本質ではない。そういった功利主義的な捉え方であれば、今、世界にさまざまな歪みを産んでいる資本主義的な考え方を強化するに過ぎない。それを抜けたところにすばらしい世界が広がっており、そういう存在があるということに気づいてほしい。

Profile

1978年京都市生まれ。2003年東京大学大学院 農学生命科学研究科修了。埼玉県新座市・平林寺にて3年半の修行生活を送った後、2007年より退蔵院副住職。日本文化の発信・交流が高く評価され、2009年観光庁Visit Japan大使に任命される。2016年『日経ビジネス』誌の「次代を創る100人」に選出され、同年より「日米リーダーシッププログラム」フェローに就任。2018年より米・スタンフォード大客員講師。2019年文化庁長官表彰(文化庁)、重光賞(ボストン日本協会)受賞。2021年より(株)バイキューブ社外監査役、京都市教育委員会委員。2022年より京都観光大使。

2011年には、日本の禅宗を代表してヴァチカンで前ローマ教皇に謁見、2014年には日本の若手宗教家を代表してダライ・ラマ14世と会談し、世界のさまざまな宗教家・リーダーと交流。また、世界経済フォーラム年次総会(ダボス会議)に出席するなど、世界各国で宗教の垣根を超えて活動中。

『大事なことから忘れなさい〜迷える心に効く三十の禅の教え〜』世界文化社(2014年)、『京都、禅の庭めぐり』PHP(2016年)、『ビジネスZEN入門』講談社新書(2016年)

Category
社会科学

01

後期

「想定
の範囲内
の差異」
の向こう側へ

ISHII Miho

文化人類学を通して「あたりまえメカネ」を
外してみる

石井 美保

京都大学人文科学研究所 准教授



講義概要

近年、あちこちの大学や企業で、多様性の尊重や異文化理解の重要性が喧伝されている。他者理解やコミュニケーション・スキルの向上を目指すための講習なども盛んだ。だが多くの場合、そうした場で想定されている「多様性」や「異文化」は、言語や生活習慣の違いといった「想定内の差異」であるようにみえる。それらは目的合理性や自律性、効率性といった近代社会の前提を揺るがすものではない。他方で、文化人類学が目を見てきたのはそうした近代合理性の外側にあるものたちだ。たとえば呪術や儀礼、贈与にアナキズム。近代社会の基準でみれば、それらは意味のわからないもの、取るに足りないもの、ネガティブなものにもみえるだろう。だが、そうした物事のもつローカルな論理を追究することで、見えてくるものがある。それは、「この私」という強固な主体の座を「降りる」という可能性だったり、既存の国家や制度の妥当性を疑う姿勢だったりするかもしれない。この講義では、主に呪術や憑依にまつわる具体的な事例を取り上げながら、既存の制度や「この私」を維持・拡張していくような思考とは異なる、オルタナティブな実践や考え方への手がかりを受講生の皆さんとともに考えていきたい。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

目的合理性、自律性、効率性——私たちが知らない間に身につけ、内面化している近代社会の枠組みや規範をカッコに入れてみることで、世界の見え方はおのずと少し変わってくる。それは、「想定内の差異」の向こう側に出てみることで、自分と世界の「あたりまえ」をずらしてみることもできる。フィールドワークで培われた身体感覚に根ざしつつ、自己のありようを揺さぶる他者との出会いを通して、私たちの日常を規定するさまざまな前提を相対化してきた文化人類学の思考法を学ぶことで、近代社会の「あたりまえ」に収まらない新たな発想や関係性へのヒントを見つけることができる。

Profile

これまで、アフリカのタンザニアとガーナ、南インドで人類学的フィールドワークを行ってきました。タンザニアでは、「ラストファリ運動」と呼ばれる黒人運動と、この運動にかかわる都市出稼ぎ民の生活について。ガーナでは、多民族的な開拓移民社会における精霊祭祀と妖術、呪術について。そして南インドでは、「ブータ祭祀」と呼ばれる憑依をともなう神霊祭祀について、調査を行ってきました。主な研究テーマは憑依・呪術・儀礼をはじめとする人々の宗教実践ですが、これに関連して、①村落社会における土地制度と母系制、②宗教実践と交易・商業との関係、③儀礼における身体性とパースペクティヴィティ、④神霊祭祀と環境運動、大規模開発の関係、⑤人間と非人間の社会的なインタラクション 等のテーマについても調査研究を進めています。

稲谷 龍彦

京都大学大学院法学研究科 教授



講義概要

本講義では、AIが法に及ぼす影響について、①AIを活用するために法はどのように変化する必要があるのか(AIガバナンス)、②AIが用いられることによって法システムはどのように変化することになるのか(リーガルテック)の、相互に関係する2つの視点から解き明かすことを目的とする。人間の大規模な協調活動を可能とする認知的ニッチとしての法の構築・運用にAIが関与することは、理性と自由意志を持つ自律的個人としての人間を基礎とする近代的な法のあり方に根本的な変容をもたらす可能性がある。この可能性を理解しつつ、AIと法の望ましい関係性を問うことは、DXが進む世界における人間の望ましいあり方を問うことに他ならないといえるだろう。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

AIと法との関係性については、既に様々な研究がなされているが、その多くはAIが人間や社会のあり方をどのように変える可能性があるかについて深く踏み込むものではない。その理由は、先行研究の多くが、理性と自由意志を備えた自律的個人としての人間という西洋近代的な人間像を所与の前提として、AIをその秩序の中に置くことにとどまっているからである。しかし、このような人間像に対しては、20世紀後半以後の現代思想において深刻な疑問が呈されてきたのみならず、認知科学をはじめとする実証的な研究とも整合するものではない。AIが西洋近代的な人間観と相容れない側面を有することが理解されるにつれて、人間観そのものをアップデートし、AIを規律しつつAIを最大限に活用できる法システムのあり方を検討することが不可欠となっている。本研究は、このような喫緊の問題意識に応え、AI時代の新たな法のあり方を問うことを通じて、既存の法秩序のあり方にグローバルなレベルでインパクトを与えようとするものである。

Profile

2005年東京大学文学部卒。2008年京都大学大学院法学研究科法曹養成専攻修了。同年より京都大学大学院法学研究科助教。2011年より同准教授。2021年より現職。2013-2014年にかけてノリ政治学院法科大学院、2014-2015年にかけてシカゴ大学政治学部において在外研究。専門はグローバルな企業犯罪法制を中心とする企業犯罪法制と科学技術法ガバナンス。京都大学法政策共同研究センターにおいて、学際的な研究ユニットである「人工知能と法」研究ユニットのPIを務める。内閣官房・経済産業省・デジタル庁等において、日本社会のDXに関する各種有識者会議の委員を務めている。

Category

社会科学

03

後期

21世紀国際政治の
構造と課題

NAKANISHI Hiroshi

歴史的視点からみた世界の現状と
日本の立ち位置

中西 寛

京都大学公共政策大学院 教授

講義概要

現代世界が大きな変動期にあることは明らかであり、将来を見通すことはますます困難になっている。こうした時代にあっては歴史的な流れを理解した上で今の時代が向かう方向感覚を問いなおすことが役に立つ。本講義では、長期的な歴史の軸を踏まえて現代世界の位置づけを問いなおした上で、国際社会が取り組むべき課題や日本の立ち位置について論じる。まず、20世紀の世界を俯瞰しつつ21世紀国際政治の課題を論じた上で、日本の近現代史について捉え直し、世界の中で日本の立ち位置について論じる。その際には伝統的な政治外交史とマクロ・ヒストリーの巨視的な視点を組み合わせ、また、自然科学と人文社会科学の分野を横断する視点の重要性にも配慮する。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

国際情勢や各国外交については日々のニュースや時事解説で触れることは多い。しかしそれらはニュース価値のある情報だけを切り抜いて報じられることが一般的であり、その構造的、長期的背景を知る機会は少ない。しかし国際政治にもニュースでは取り上げられにくい深層構造といったものが存在し、その上でニュースになる日常的な出来事が繰り返されているのである。現代のような大きな歴史的変動期には深層構造そのものが動揺、変化しているのであってその点に注意を払うことが現変化の時代を理解し、行動するための歴史感覚を養うことにつながると期待できる。

Profile

1962年大阪府生。京都大学法学部、京都大学大学院法学研究科、シカゴ大学歴史学部大学院を経て1991年京都大学法学部助教授、2002年京都大学大学院法学研究科教授、2024年から京都大学公共政策大学院教授。専門は国際政治学、特に20世紀国際政治史、安全保障論、日本外交論など。日本国際政治学会理事長(2014-16年)、「国力としての防衛力を総合的に考える有識者会議」委員(2022年)、外務省「開発協力大綱改定に関する有識者懇談会」座長(2022年)など。主要著作「国際政治とは何か-地球社会における人間と秩序」(中公新書)、五百旗頭真編著「戦後日本外交史」(有斐閣)、中西寛他著「漂流するリベラル国際秩序」(日本経済新聞社出版)など。

待鳥 聡史

京都大学大学院法学研究科 教授



講義概要

世界的な「選挙イヤー」であった2024年を経て、世界の民主主義は明らかに脆弱性を高めた。日本を含め、安定した基盤を持つ政権は少なくなり、各国政治は内向きな傾向を強める一方で、国際政治には多くの不安定要因が生じている。一部には民主主義体制を放棄するように見える動きさえ存在する。このような状況はどこから来て、どこに向かうのだろうか。権威主義体制が優越する時代が到来するのだろうか。この講義では、主に民主主義体制下における政党政治の応答性という観点から、比較政治学の知見を活かした現状認識と将来展望を提示し、受講者の皆さんが世界を理解する手がかりを得ることを目的とする。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

政治学を含む社会科学の研究成果は、直接世の中を変えることを目的にはしていない。しかし、その成果を受け止める人が、研究対象となっている事象や人物への理解を深め、現象が生じている理由を知ること、自らの立場や行動を変化させると、世の中を変えることになる。今回の講義の場合も、現在の民主主義の基本原理は何か、そこに政党がいかに関わってきたのか、なぜ課題が生じているのか、といったテーマについて、理論的な検討や幅広い比較を通じて考察することで、受講される方が現代政治との向き合い方を変えることにつながるかもしれない。

Profile

1971年生まれ。京都大学法学部卒業、同大学院法学研究科博士後期課程(政治学専攻)退学。京都大学博士(法学)。大阪大学法学部助手・助教授、京都大学大学院法学研究科助教授などを経て、2007年より現職。2022～24年、京都大学公共政策大学院長。この間、ウィスコンシン大学大学院政治学研究科、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院国際関係論・太平洋地域研究科で在外研究。専門は比較政治論、とくに民主主義体制下での大統領や首相の権力基盤、議会や政党との関係について研究している。

主要業績として、『財政再建と民主主義』有斐閣、アメリカ学会清水博賞(2003年)、『首相政治の制度分析』千倉書房、サントリー学芸賞(2012年)、『代議制民主主義』中公新書(2015年)、『政治改革再考』新潮社(2020年)、Political Reform Reconsidered, Springer(2023年)など。

Category

自然科学

01

後期

においは薬になりますか

ITO Michio

多勢の意見が必ずしも真理なのではない

伊藤 美千穂

国立医薬品食品衛生研究所生薬部 部長



講義概要

においは見えない、拡散するなど科学的取り扱いに難点がある上に、五感のひとつである嗅覚が記憶と強く結びついているということなど、サイエンスになりにくい要素を多く含んでいる。このため、においの薬理活性を動物実験等のいわゆる薬学的に汎用される方法で示すためにはいろいろと工夫が必要だった。他方、日本の法律では生薬の品質評価基準のひとつににおいを使う。漢方薬・生薬の世界では、においは医薬品の品質のもののひとつになるのである。

扱い方によって大きく捉え方が変わるにおいに期待できること、またにおいのある医薬品としての漢方薬・生薬類を日本はどう扱ってきたのかなど、においを端緒に、身近でありながらあまり知られていない天然物医薬品の裏の世界を紹介する。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

超高齢化社会に急速に変容していく日本では、介護を必要とする人口とそれに伴う医療費の急増、高止まりなどが予想され、健康自己管理、健康寿命の延伸の必要性などが強く言われるようになっていく。セルフメディケーションとして品質保証がしっかりなされた一般用医薬品を上手に利用しつつ、より手に取りやすい天然物医薬品や健康食品などがさらに活用されることが期待される。においを利用する商品は雑貨の区分で扱われることが多く、手軽に大きく利点がある反面、医薬品と異なり、品質保証・品質管理の面では注意を要する。ポイントを抑えつつ、医薬品のみならず、雑貨や食品などに分類されるものも上手に利用することで、より豊かで健康な日常が手に入るのではないだろうか。

Profile

1969年大阪生まれ。1988年神戸女学院高等学校卒業、京都大学薬学部入学、1992年同大学薬学部卒業、1994年同研究科修士課程薬学専攻修了、博士後期課程に進学、1996年同課程を中途退学、京都大学薬学部助手に採用される。1999年博士(薬学)の学位取得。2002～3年米国ワシントン州立大学生物化学研究所に博士研究員として留学、2003年京都大学大学院薬学研究科助教授(2007年に准教授に名称変更)、2022年より国立医薬品食品衛生研究所 生薬部 部長。専門分野は生薬学・薬用植物学。特に、精油成分生合成研究、においの生薬薬理学的検討、薬用植物の栽培研究、生薬・天然物のレギュラトリーサイエンス、フィールドワークを軸とした伝統医薬の調査研究など。大学での教育研究の傍ら、厚生労働省薬事食品衛生審議会委員や医薬品医療機器総合機構日本薬局方原案審議会生薬等委員会委員、日本学術会議連携会員、また各種学会の理事、評議員、代議員等の活動も。研究のため、また国際学会やWHO、ISO等の国際会議出席のための出張が多く、途上国から先進国まで海外経験は豊富。2006年日本生薬学会学術奨励賞、2012年第37回漢方研究イスクラ奨励賞、2016年国際薬学連合Fellow award、2017年第29回日本東洋医学会奨励賞受賞、2021年令和3年度日本生薬学会学術貢献賞受賞。

北川 進

京都大学 理事・副学長(研究推進担当)
京都大学高等研究院 特別教授



講義概要

ナノサイズの空間を持つ物質は我々の周りに溢れており、貯蔵、分離、触媒など生活に密着する用途に用いられ多孔性材料として良く知られている。代表物質である活性炭は古代エジプトにおいて医療用に用いられたことがパピルスに記述されており、現在においても水の浄化など幅広く用いられている。人類がその活性炭を発見したのち3000年を経て、18世紀に当時の新しい多孔性材料として天然鉱石から無機物であるゼオライトが発見され、20世紀前半の人工合成の成功を経て、石油産業をはじめとして人類の生活に大きな進歩をもたらした。このように既存の多孔性材料は、私たちの生活に不可欠のものとして長年にわたって利用されてきた。もし、活性炭やゼオライトが担ってきたナノ細孔による機能を凌駕するような、貯蔵、分離などの機能を有する、あるいはまったく新しい多孔性機能を有する材料が発見されれば、人類の生活に革新的な変化をもたらす事が期待される。この革新的材料を生み出す空間の化学を紹介し、身の回りの気体がかかわる現代の課題（地球環境、エネルギー、医療、健康）への挑戦について述べてみたい。

Profile

1974年京都大学工学部卒業、1976年京都大学大学院工学研究科修士課程修了、1979年京都大学大学院工学研究科博士課程修了。1988～1992年近畿大学理工学部助教授、1992～1998年東京理科大学理学部教授、1998～2017年京都大学大学院工学研究科教授、2007～2012年京都大学物質・細胞統合システム拠点副拠点長・教授、2013～2023年京都大学物質・細胞統合システム拠点拠点長・教授、2016～2018年 京都大学高等研究院副院長、2017年より京都大学高等研究院特別教授、2024年より京都大学京都大学理事・副学長(研究推進担当)。2009年日本化学会賞、2010年トムソン・ロイター引用栄誉賞、2011年紫綬褒章、2013年京都大学孜孜賞、2013年英国王立化学会フェロー会員、2013年江崎玲於奈賞、2016年日本学士院賞、2016年米国化学会バソコ賞、2017年藤原賞、2017年ソルベイ未来化学賞、2018年Grand Prix of the Fondation de la Maison de la Chimie など多数受賞。2019年学士院会員、2023年英国王立協会外国人会員。新規多孔性材料研究の先駆者であり、地球温暖化の原因となる二酸化炭素の吸着など広範な未来用途に用いられる可能性がある新規材料、多孔性配位高分子(PCP) (または有機-金属構造体(MOF))を開発した。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

炭素資源およびエネルギー資源として重宝してきた石炭、石油や天然ガスはいずれ尽きる。地下資源代替として、ユビキタスな物質の利用(例えば空気や河川、海の水)が究極である。実現すれば日本はもはや資源のない国とは言わないであろう。そして資源をめぐる紛争は緩和され平和な人類社会実現に貢献する科学・技術となるであろう。そのためには気体を自在に操作する科学の創成、その技術の発展が不可欠である。東洋では、「仙人は霞(水蒸気、空気)を食って生きる」と言われる。まさに空気、水を原料として身の回りのものができる未来、私たちが仙人となることはあながち空想ではないように思える。

Category
自然科学
03
後期

尊厳ある生と死へのケア

TAMURA Keiko

重篤な病を患う人であることへの支援

田村 恵子

大阪歯科大学 大学院看護学研究科 開設準備室 室長
京都大学 名誉教授



講義概要

わが国の緩和ケアは、これまでがん医療を中心に発展してきました。しかし、現在では、緩和ケアはがんだけでなく、末期心不全や呼吸不全、腎不全など重篤な病を患う人や認知症にも適用されるようになりつつあります。緩和ケアは、身体的・精神的症状の軽減を主とする症状マネジメントに焦点が当てられることがほとんどですが、その本質は病むことや老いること、死と向かいあうことを余儀なくされることに苦しみ、これからの人生をどう生きるかについて思い悩む人に寄り添い、一緒に考えていくことにあります。病いや老い、死と向かいあうことなど人としての根源的な苦悩(スピリチュアルペイン)について、互いに聴きあう「対話」を通して考えてみましょう。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

緩和ケアの本質は、究極の孤独ともいえる状況で苦悩する人に寄り添い続け、一人ぼっちにしないことです。特に、スピリチュアルケアは人生の旅路を辿る人にどう寄り添うか、どのような寄り添いが不安や恐怖を和らげられるかについて探求する営みです。これまで、このような問いは宗教や哲学が取り組むべき課題とされてきました。しかし、スピリチュアルケアが浸透することで、その人の全人的な苦悩が和らぎ、死は生と一体であることに気づくようになりました。死を含む生に焦点が当たるようになり、人は何を大切にしようとするかについての探求を始めています。死は単に生理的な出来事ではなく、生にとり不可欠であることが認識されるようになりつつあります。

Profile

1996年聖路加看護大学大学院看護学研究科修了。1997年がん看護専門看護師認定を取得。わが国における末期がんに対するホスピスケアの草分けである大阪市・淀川キリスト教病院で1987年より27年間務め、約6000名を超える看取りに向き合う。2006年大阪大学大学院医学系研究科修了(医学博士)。2014年1月より京都大学大学院医学研究科緩和ケア看護学分野教授に就任。2024年5月より現職。2015年7月より、地域で生活するがん患者や家族、市民が対話を通して聴きあい、生きる知恵や支え合う力を育む「NPO法人ともいき京都」を創始し、コンパッション・コミュニティづくりを目指している。ホスピスでがん患者を最後まで看取り、家族の看護にも取り組む姿がNHK「プロフェッショナル仕事の流儀」で2008年に放映された。代表的な著書に「看護に活かすスピリチュアルケアの手引き第2版」(青海社)、「共に生きるスピリチュアルケア」(創元社)「鎮静と安楽死のグレーゾーンを問う—医学・看護学・生命倫理学・法学の視点」(中外医学社)などがある。

土井 隆雄

宇宙飛行士
龍谷大学 客員教授
京都大学大学院農学研究科 研究員



講義概要

1961年ガガーリンによる人類初の有人宇宙飛行以来、宇宙は人類にとっての進出可能な新世界となった。日本の『第一期有人宇宙活動』は、1985年に国際宇宙ステーション計画への参加決定及び第一次材料実験に参加する日本人宇宙飛行士の選抜により始まった。日本は短期有人宇宙ミッションを通して、宇宙実験技術、ロボットアーム操作技術、船外活動技術など有人宇宙活動に必須な技術を獲得した。『第二期有人宇宙活動』は、2008年「きぼう」日本実験棟を宇宙ステーションに取り付けるミッションを契機に始まった。日本人宇宙飛行士による長期ミッションが開始され、宇宙飛行士訓練、有人宇宙施設の運用、宇宙貨物船の飛行などの技術を獲得した。日本そして世界の有人宇宙活動は何をめざし、私たちはどこに行こうとしているのだろうか。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

霊長類の祖先がかつて森林からサバンナへ進出したことが人類進化を誘発したように、地球を離れ宇宙をめざす有人宇宙活動は進化の一形態とも考えられる。そう遠くない未来、人類は宇宙空間をも居住空間とし、そこに新たな社会を創造するだろう。私たちは、今、宇宙を切り開く有人宇宙活動のための新しい総合科学を「有人宇宙学」と名付けることにしよう。それは、人類が宇宙に展開していくことを記述できる学問である。有人宇宙学の創出は、「ソーシャル・ハビタビリティ(人間社会の存在可能条件)」という宇宙に持続可能な人間社会を構築するための新しい指標の確立・体系化を可能にする。「ソーシャル・ハビタビリティ」は、物理的・生化学的条件のみでなく、技術やそこに居住する人類のコミュニティの制約条件によって左右される社会存在の限界を定量的に決定する新たな指標である。

Profile

1954年、東京生まれ。1983年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。2004年、ライス大学大学院博士課程修了。工学・理学博士。1997年、スペースシャトル「コロンビア号」に搭乗し、日本人として初めての船外活動を行う。2008年、スペースシャトル「エンデバー号」に搭乗。ロボットアームを操作し、日本初の有人宇宙施設「きぼう」日本実験棟船内保管室を国際宇宙ステーションに取り付ける。2009年から2016年にかけて、国連宇宙部で国連宇宙応用専門官として宇宙科学技術の啓蒙普及活動に取り組む。2016年4月より京都大学宇宙総合学研究ユニット特定教授に就任。2002年と2007年には超新星を発見する。2016年4月より京都大学宇宙総合学研究ユニット特定教授に就任。2020年4月より京都大学大学院総合生存学館(思修館)特任教授、2020年7月より特定教授。

Category

自然科学

05

後期

地震発生長期予測の現状

NISHIMURA Takuya

南海トラフや活断層で発生する
地震の発生確率とは？

西村 卓也

京都大学防災研究所附属地震災害研究センター 教授
京都大学防災研究所 副所長

講義概要

2025年1月15日に南海トラフ巨大地震が今後30年間に発生する確率が約80%であることが、政府の地震調査委員会から発表されました。地震の予知に関する研究は、昔から取り組まれてきましたが、地震の予知が実現する見込みは立っていません。一方で、地震発生の日時を特定しない長期的な予測は、南海トラフ地震のように現在でも地震調査委員会により実施されています。本講義では、このように現在行われている地震の長期予測に関して手法や予測結果について解説するとともに、地殻変動データなどを用いた新たな予測手法に向けた研究の現状についても紹介したい。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

南海トラフ巨大地震が発生すれば、西日本の広範な地域において、地震や津波による大災害が発生することが確実視されている。将来発生する災害を軽減するためには、地震がいつ頃起こりそうかだけでなく、どの地域にどの程度の規模の地震が発生するのかを想定して、対策を進める必要がある。日本列島では、人工衛星を用いて自分の位置を正確に測定することができGNSS観測網が展開されて30年が経過し、日本列島の地殻変動を把握するために大きな成果を挙げており、その中には地震の長期予測に役立つ成果もある。この研究では、GNSSを用いた地震の長期予測に関する研究、特に現在活断層調査だけに基づいている内陸地震に対する予測手法を高度化して、予測精度の向上を目指す。

Profile

1972年、北海道生まれ。1997年東北大学大学院理学研究科博士前期課程修了後、建設省（現、国土交通省）国土地理院に入省。同院地理地殻活動研究センター研究員、主任研究官など歴任する中、2002年には文部科学省宇宙開発関連在外研究員と米国地質調査所にて研究を行う。2013年より京都大学防災研究所准教授、2023年より教授。2024年より防災研究所副所長。博士（理学）。学生時代より一貫してGNSSデータなどを用いた地殻変動の解析により、地震発生メカニズムの研究を行う。現在、政府の地震調査委員会、同長期評価部会、南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会の委員を務める。受賞歴は、日本測地学会坪井賞（2010年）、日本地震学会論文賞（2013年、2016年、2024年）。

益田 玲爾

京都大学 フィールド科学教育研究センター
舞鶴水産実験所 教授



講義概要

京都府北部の舞鶴湾で、毎月2回の潜水調査を2002年から継続している。海の中にも四季折々の変化があるとともに、温暖化の傾向も見えてくる。加えて、高浜原子力発電所に近い福井県の高浜町音海(おとみ)では、2004年から継続して潜水し、原発の稼働中は冬にも南方種の優占する様子を観察してきた。原発の抱える問題について考えさせられるとともに、温暖化の進んだ50年先の日本海の一つの姿を見た気がした。さらに、気仙沼市舞根湾では、2011年5月から継続して潜水している。津波後に回復してきた海の生物たちには、生態系の持つ強靭さを教わった。海の中には多様な生物が生息しており、これらがどのようにつながっているかを理解することが、管理と保全の要と考えている。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

人類は有史以前から海の恵みに大きく依存してきた。この先の人類の歩みにも、海洋のもたらす恩恵は不可欠であろう。海を直接観察して得られる知見は、海が持つ生産性を理解し、これを適切に管理する上での示唆を与えてくれる。海洋生物資源の管理は、我々はどうに魚を食すべきか、という問題でもある。そこで、魚の食べ方について提案することで、生物資源の利用を、自分の周りから変えたいと思っている。一方で、潜水で得られた着想をもとに、海の生物を飼育して観察し、行動のからくりをさぐる「魚類心理学」的な研究も進めている。魚類の行動観察で得られた知見には、ヒトの行動理解に通じるものもあるかもしれない。

Profile

1965年、横浜市に生まれ、以後首都圏・関西・名古屋の大都市圏を2年ごとに転居。1985年、静岡大学理学部生物学科に入学。ダイビング部に入り、海の生物について幅広く学ぶが、これが過ぎて留年。1990年、東京大学農学系研究科に進学し、海洋研究所にて塚本勝巳教授の指導を受け、シマアジの群れ行動について研究。1996年から2年間、日本学術振興会海外特別研究員としてスコットランドのダンススタッフネージュ海洋研究所に留学し、ニシンの行動について研究。1998年、ハワイのオーシャンニック・インスティテュートに研究員として就職。魚類の行動研究を栽培漁業に応用する過程で、魚類の学習能力を調べる実験に着手。2000年4月、京都大学水産実験所に助手として着任。2003年助教授、2014年舞鶴水産実験所長、2020年教授。趣味は、ダイビング、ランニング、テニス、料理、ピアノ。舞鶴水産実験所には、保育園児や小学生からシニアまで、幅広い年齢層の方が訪れるため、それぞれに対し、潜って見てきた魚の話や魚の食べ方の話をしている。

Category

自然科学

07

後期

免疫システムから 老年病を考える

MINATO Nagahito

高齢化社会—老化の生理と病理をめぐって

湊 長博

京都大学 総長



講義概要

老化の定義はむずかしいが、生物には種に固有の寿命（ライフスパン）があり、その時間軸に基づく個体の変化として考える限りそれは生理である。他方、加齢に伴い諸組織の機能障害が病的に顕在化することがあり、加齢随伴疾患（老年病）と総称される。加齢に伴い最も大きな質的変容を示す組織は免疫システムであり免疫老化といわれる。免疫老化自体は免疫システムの恒常性維持のために不可避の生理プロセスだが、近年これが様々な老年病発症の重要な素因となっていることが示唆されてきている。本講義では免疫システムの視点から、最新の知見に基づいて老化は生理か病理かというむずかしい問題にアプローチし、議論を深めたい。

※講義では、内容が一部変更になる可能性があります。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

人口の高齢化の進行は、いまや地球上のほぼ全ての国の不可避的現象である。特に日本はその先陣をきっており、2050年の老年人口（65歳以上）の割合は、35%以上と予測されている。この社会全体への影響は甚大である。ひとつは社会経済の仕組みそのものへの影響で、抜本的な再構築を余儀なくされるであろうし、同時にこれに伴い、各年代の個々人の生活様式も不可避的に大きな変容を迫られることになる。このような背景の中で、老化の生物学と老年病についての理解を深めることは、それへの社会の対応を考える上で、単なる医学を越えた本質的な課題と考えられる。私たちは人間の生理と病理の境界で多くの困難な判断と合意を迫られることになるだろう。

Profile

医学博士（京都大学）。専門は免疫学。1975年京都大学医学部卒業。米国アルバートアインシュタイン医科大学研究員、自治医科大学内科助教授等を経て、1992年京都大学医学部教授。2010年京都大学大学院医学研究科長・医学部長、2014年京都大学理事・副学長、2017年よりプロボストを務めた後、2020年10月より第27代京都大学総長。免疫細胞生物学の多彩な基礎研究を展開、220編余の原著論文を発表。2018年度ノーベル生理学・医学賞受賞者本庶佑教授の共同研究者として新しいがん免疫療法の開発にも貢献。2014年JCA-永山賞（旧JCA-CHAAO賞）、2016年創薬科学賞、2018年岡本国際賞など受賞。

宇宙移住のための 三つのコアコンセプト

YAMASHIKI Yosuke

地球以外の惑星に居住することが
可能か？



山敷 庸亮

京都大学大学院総合生存学館 教授

講義概要

月や火星など他の天体への移住を考えた際、まずは我々の惑星地球がどのような環境か、そしてどういった条件があれば地球外に居住、ひいては移住できるかを考えなければならない。これを考えるうえで重要となる概念を「宇宙移住のための3つのコアコンセプト:コアバイオーム、コアテクノロジー、コアソサエティ」と定義した。地球上ではこの要素のいくらかが欠けたくらいでは死者が多く出ることはないが、宇宙ではこのうちのどれか、特に生存基盤技術を支えるコアテクノロジーに異常が生じた段階で生命へのリスクが顕在化する。宇宙での我々の未来を探るためには、まず我々が地球でどのように生きているか、生きるべきかをもう一度問いたす必要がある。特に、人間の生存のみに焦点を当てる「生存基盤的区分」と、人類は生きるためには必ず自然と共生が必要であるとする「自然資本的区分」について考え、宇宙の中で人類がどのような存在であるかをもう一度問いたす。さらに惑星全体のテラフォーミングではなく惑星の一部に地球環境を再現する「テラウインドウズ」の考え方について述べる。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

月面開発、宇宙ホテル、そして火星への探査など、次世代に向けて大きな変革が見られる中、宇宙に居住する意義、そして宇宙居住における問題点と解決のためのコアテクノロジー(放射線防御技術、人工重力技術、生命維持・環境制御技術、生態系維持技術、食料生産技術)を学ぶことにより、これからの世の中を牽引するイノベーション技術と、地球環境保全技術、さらに宇宙時代の各国の地政学についても学ぶことができる。

Profile

1990年に京都大学工学部を卒業し、1994年にサンパウロ大学工科大学院(EPUSP)で修士課程を修了、1999年に京都大学で博士(工学)を修得。その後、日本大学理工学部講師・准教授、東京大学非常勤講師、京都大学防災研究所准教授などを歴任し、2014年より大学院総合生存学館教授。水環境工学や水資源工学を専門とし、陸域と海洋の相互作用に関する研究を行ってきた。2011年の福島第一原子力発電所事故後は、水環境中の放射性物質の挙動と影響評価に焦点を当てた研究に従事、数々の論文を執筆する。2015年からは宇宙における水の研究を推進し、系外惑星のハビタブルゾーンと放射線環境を比較可能な太陽系外惑星データベース「ExoKyoto」を開発・公開する。また、2019年からはアリゾナ大学の人工隔離生態系「Biosphere 2」を用いたスペースキャンプを企画・実践し、宇宙居住研究に取り組む。著書に「有人宇宙学：宇宙移住のための3つのコアコンセプト」があります。現在は、3つのコアコンセプトのコアバイオーム・コアテクノロジー・コアソサエティの実現に向けてNASAをはじめとする国際共同研究をはじめ企業との共同研究を行なっている。

Category

自然科学

09

後期

脳のネットワーク

WATANABE Dai

脳の動作原理の解明に向けて

渡邊 大

京都大学大学院医学研究科 教授



講義概要

生物を取り巻く環境は、一定ではなく時々刻々と変化する。したがって生命の危険につながる外界の変化に対して迅速に対応する能力は、生物にとって極めて重要である。環境は多種多様な要因が複合的に作用するため、その変化は複雑であり正確に予測することは困難である。生物はこのような不確定な未来へ対処する情報システムとして脳を発達させてきた。脳は、神経細胞から構成されるネットワークであり、その動作を介して、情報を収集し、統合的に分析を行い、柔軟に意思決定を下すことで、危機を回避しようとする。しかもこの神経細胞のネットワークは、自己組織的にアップデートし、適応的に能力を高めることができる。本講義では、脳が神経細胞のネットワークであるという観点から、脳の本質について考察し、さらにその病態解明や応用に向けたアプローチについて理解を深める。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

脳のネットワークの研究が進展することで、生物学や医学にとどまらず、様々な自然科学領域に波及効果があり、その発展に寄与する。脳疾患の診断・治療法の開発、革新的なロボット技術や人工知能を可能にする情報テクノロジーの創出など、社会や経済の発展につながると期待される。さらに「人間とは何か」という根源的な問いに迫るためにも、人間らしい考えや心の基盤となる脳の動作について理解することは重要であり、人文・社会科学の広い領域にも資することが期待される。

Profile

1990年 京都大学医学部医学科卒業。1997年 京都大学大学院医学研究科博士課程修了(医学博士)。1997年 京都大学医学部助手、2003年 米国カリフォルニア工科大学博士研究員。2005年 大阪バイオサイエンス研究所システムズ生物学部門副部長を経て、2006年 京都大学大学院生命科学研究科認知情報学講座・医学研究科生体情報科学講座教授兼任。2014年より医学研究科生体情報科学講座教授専任。

Category
複合領域

01

後期

「ごみ」は意外に雄弁だ。

ASARI Misuzu

ごみを通して暮らしや社会を見つめる

浅利 美鈴

総合地球環境学研究所 基盤研究部 教授



講義概要

人という人、世の中の誰もが出すと言っても過言ではないのが「ごみ」です。

講義に参加される皆様も、多かれ少なかれ、日々出されているはずで。

少し目を向けて頂ければ、そして、耳を傾けて頂ければ、その不思議や悩み、矛盾や葛藤から、目を離せなくなるでしょう。

そう、何と言っても「ごみ」とは、人間の価値観による産物だからです。

人、場所、時代…様々な要因で変わる「ごみ」の世界に、ご一緒に頂けませんか？

ごみは、可能性にもあふれています。この匂い、吸引力、人が生み出す生々しさ…それだけではありません。実は、カーボンニュートラル社会の実現に向けた切り札でもあるのです。

世の中をどのように変えるのか、どんなインパクトがあるのか

持続可能な社会の構築に向けては、資源循環システムの構築が必須であり、「ごみ」の3R(リデュース・リユース・リサイクル)が行動指針となります。私の所属する研究チームでは、40年以上に渡って家庭ごみ等の組成調査を実施しており、様々な資源循環関連の施策立案の基礎情報を提供してきました。最近では、持続可能な開発目標(SDGs)においても取り上げられている食品ロスや、プラスチックごみ問題などに注目が集まり、解決に向けた研究が急がれています。今後は、カーボンニュートラルも念頭においた製品作りや資源循環、サーキュラーエコノミーの構築に向けて、実践も伴う研究展開が求められています。

Profile

京都大学大学院工学研究科卒。博士(工学)。京都大学環境科学センター助教を経て京都大学地球環境学准教授。

「ごみ」が一つの大きな研究テーマ。ごみから見た社会や暮らしのあり方を提案する。また、ごみや3Rの知識を身につけ、行動してもらうことを狙いに、毎年11月に「3R・低炭素社会検定」を実施。「環境教育」や「大学の環境管理」も研究テーマで、京都大学をフィールドに、全員参加型のエコキャンパス化を目指す「エコ〜るど京大」や「京都大学超SDGs研究ライトユニット」なども展開。また、ライフワークとして市民への啓発・教育活動にも力を注ぎ、百貨店を会場とした「びっくり!エコ100選」を8年実施。その後の展開として、資源エネルギー問題にアクションを起こす「びっくりエコ発電所」「びっくりエコ研究所」を運営。2019年から「京都超SDGsコンソーシアム」を立ち上げ、地域やフィールドでの実践活動を展開している。2021年には「京都里山SDGsラボ(ことす)」をオープン。

Category

複合領域

02

後期

日本社会における ウェルビーイング

UCHIDA Yukiho

比較文化の視点から考える
日本社会のゆくえ

内田 由紀子

京都大学人と社会の未来研究院 教授



講義概要

現在様々なところで「ウェルビーイング」というキーワードが用いられています。特に日本においては、従来の「個人の努力」による幸福の追求だけでなく、社会の中で協調的にウェルビーイングを実現する視点が重要であると考えられます。本講義では、文化心理学の立場から、個人の幸福を社会の構造や「場」との関係の中で捉え、より持続可能なウェルビーイングの実現方法を考えます。本講義では「協調的幸福」の概念を紹介します。これは、幸福が他者との関係性や社会的なつながりの中で形成されるという視点です。そしてウェルビーイングを実現するためには、個人の内面的な努力だけでなく、社会の中に適切な「場」を構築することが必要であることも提示します。具体的には、職場(柔軟な働き方や心理的安全性の確保)、地域コミュニティ(人とのつながりを促進する環境づくり)、教育と学びの場(生涯にわたる成長を支える仕組みづくり)が考えられます。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

ウェルビーイングと文化や社会との関係について考えることは、自分が所属する職場や地域における幸福とは何かを考え、それを他者と共有できるような「場」をデザインする視点を伴います。本講義では、具体的な事例を交えながら、ウェルビーイングを促進する社会のあり方について議論しますが、これまでのアメリカや西洋社会から導入されてきた「個人の最適化=ウェルビーイング」という考え方とは異なる日本における協調的幸福の強みや弱みについて検討していくことで、これからの地球社会における生き方や、新たな場づくりへの意識をもたらすことができると考えています。

Profile

京都大学教育学部卒。同大学院人間・環境学研究科修了。博士(人間・環境学)。ミシガン大学・スタンフォード大学客員研究員、甲子園大学講師、京都大学こころの未来研究センター助教、准教授、教授、スタンフォード大学フェロー等を経て、2023年より京都大学人と社会の未来研究院院長。文化とウェルビーイングに関する文化心理学研究を行っており、国際誌での学術研究発表多数。中央教育審議会など社会実装にも従事し、京都市特別顧問も務めている。国際学術誌の編集委員や学会(APS)の理事として、国際的にも活動している。主著に「これからの幸福について:文化的幸福観のすすめ」(新曜社)。

Category

文化・芸術

01

後期

いけばなの美と哲学

IKENOBŌ Senko

いけばなにみられる日本の美意識と
精神性を造形から解く

池坊 専好

華道家元池坊 次期家元



講義概要

日本のいけばなは表面的な形や色の美しさに留まらず、植物のいのちの様に美を感じ、また人と自然とを関係づけて捉えるところに、その特徴が見受けられる。

16世紀、池坊専応が「枯れた花にも華がある」と説いた哲学からは美へのまなざしと独自性がうかがえる。加えて、いけばなに於けるアシンメトリーな造形から日本の美意識を探り、その背景にある自然観についても考える。また実際の体験を通して、日本の伝統文化の根底にある「道」の精神についても五感から感じてもらう。



Profile

2015年 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 博士後期課程修了(先端ファイブ科学専攻)。小野妹子を道祖として仰ぎ、室町時代にその理念を確立させた華道家元池坊の次期家元。日本いけばな芸術協会副会長も務める。いのちをいかすという池坊いけばなの心を通した多彩な活動を展開。2013年にはハーバード大学においてワークショップを、またニューヨーク国連本部において献花を行なう。アイスランド共和国名誉領事。

Category

文化・芸術

02

後期

能面が私達に
語りかけてくるもの

KONGOU Hisanori

能面を通して、世界最古の
演劇「能」の魅力に迫る

金剛 永謹

能楽金剛流宗家



講義概要

創生期より能の歴史と共に歩んできた能面。能面は能の生命であり、能役者にとっては能の精神を教えてくれる師匠のような存在である。その数奇な運命を辿り、能面について深く考察することにより、能の真髄を探っていく。



小面



増女



孫次郎



羽衣

Profile

1951年、二十五世宗家金剛巖の長男として京都に生まれる。幼少より、父・金剛巖に師事。1998年9月能楽金剛流二十六世宗家を継承する。2003年5月金剛能楽堂を京都御所の西向かいに移転、竣工。

「舞金剛」と呼ばれる華麗で躍動感溢れる金剛流独特の芸風に、「京金剛」といわれる優美で雅やかさが加わった芸風を特徴とし、シテ方五流宗家の中で唯一関西を本拠地とする。金剛流第一回の海外公演であるカナダ・アメリカ公演団長を皮切りに、イタリア、フランス、スペイン、ポルトガル、ロシアなどでの海外公演も多数行う。

京都市芸術新人賞、京都府文化賞新人賞、京都府文化賞功労賞受賞。京都市文化功労者表彰。第67回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。2018年紫綬褒章受章。令和4年度恩賜賞・日本芸術院賞受賞。2023年重要無形文化財「能楽」各個指定保持者（人間国宝）認定。フランス芸術文化勲章オフィシエ受章。公益財団法人金剛能楽堂財団理事長。一般社団法人日本能楽会会長。一般社団法人金剛会代表理事。一般社団法人金剛能楽会代表理事。京都市立芸術大学客員教授。

著書に『金剛家の面』玉川大学出版部（2000年）、『金剛宗家の能面と能装束』三井記念美術館（2018年）がある。

Category

文化・芸術

03

後期

樂茶碗はなぜ黒いのか

RAKU Jikimya

茶碗から見る日本文化のくくり

樂 直入

樂家十五代当主



講義概要

小学生が樂美術館をおとずれると、かならずする質問があります。「ここには、どうして、黒いお茶碗ばかりなべているの〜?」「おじさんも黒い茶碗ついているのか?」「おじさんは、色きらいなん?黄色とかピンクとか緑とか」この本質的で素朴な問いに、どの様に答えればよいのでしょうか。「黒色は千利休と言うえらいお茶人の〈侘び茶〉の精神なの」と答えればよいのでしょうか。それとも、「黒はすべての色を含んでいる」とでも…。

この子供達の問いは日本文化の根底につながっています。

右に掲載の茶碗は「黒」ならず「白」。近作「White Rook」とよばれている茶碗。

「黒」「白」「赤」と、それはたんなる「色」ではない深い意味を負っています。



焼貫白巖石茶碗 銘 晩 2022年制作

Profile

樂家十五代当主。公益財団法人樂美術館 理事長、館長。公益財団法人金剛能樂堂 理事。公益財団法人佐川美術館名誉顧問。京都国立近代美術館評議員、十備会会員。1973年東京藝術大学彫刻科卒業後、イタリア留学ローマアカデミアにて学ぶ。1981年十五代吉左衛門襲名。1987年プリンストン大学ヴィジティングフェローシップ招待渡米。1992年通産省「感性社会研究会」委員。1994年淡交ヴィエンナーレ審査委員。1995年土岐市「現代茶陶展」審査委員。2007年佐川美術館「樂吉左衛門館」の建築設計創案・監修を行う。2019年7月8日をもって樂家当主を長男に譲り「直入」と改名、戸籍を変更する。田部美術館大賞「茶の湯造形展」審査委員。1987年プリンストン大学・ヴィジティング・フェローシップ受賞（アメリカ・プリンストン大学）、日本陶磁協会賞、1988年京都市芸術新人賞（京都市）、1990年京都府文化賞奨励賞（京都府）、1991年京都美術文化賞（中信美術奨励基金）、1992年レオンドーロ賞（イタリア、ファエンツァ市・イ・フィオーリ）、日本陶磁協会賞金賞、1993年MOA 岡田茂吉賞優秀賞（MOA 美術館）、1997年第1回織部賞（岐阜県）、1998年第40回毎日芸術賞（毎日新聞社）、2000年フランス芸術・文化勳章シュヴァリエ受章（フランス政府）、京都府文化功労賞（京都府）、第3回茶道文化賞（裏千家今日庵）、第15回MOA 岡田茂吉賞大賞（MOA 美術館）、京都市文化功労賞（京都市）、京都府文化賞特別功労賞（京都府）など受賞多数。2015年「RAKU: THE COSMOS IN A TEA BOWL」展（国際交流基金共催）をロサンゼルス カウンティ美術館、サンクトペテルブルク・エルミタージュ美術館、モスクワ・プーシキン美術館にて開催。2016年「茶碗の中の宇宙 樂家一子相伝の芸術」展 京都国立近代美術館、東京国立近代美術館。「無限の宇宙一掌中を超えて」京都国立近代美術館コレクション展にて企画・出品など、その他多数。

主な著書に「樂吉左衛門」陶VOL93 京都書院（1993年）、「茶道具の世界 樂茶碗」淡交社 <共著・責任編集>（2000年）、「茶道具の世界 和物茶碗」淡交社 <共著・責任編集>（2000年）、「樂焼創成・樂ってなんだろう」淡交社（2001年）、「茶室をつくった 5年間の日々を書き綴った建築日誌」淡交社（2008年）、「ちゃわんや 二人の息子と若き人々へ」淡交社（2012年）、「定本 樂歴代」淡交社（2013年）、「月と華 宗入と乾山 元禄を生きた雁金屋の従兄弟ども」樂美術館（2014年）、「RAKU: A Legacy of Japanese Tea Ceramics」共著・樂篤人 青幻舎（2015年）、「茶碗の中の宇宙」ロシア語版 著書 共著・エルミタージュ美術館・プーシキン美術館編（2015年）、「光悦逍遥」京都新聞社朝刊連載 1年間 26回（2015年）、「Darkness and Light」共著・樂雅臣（2016年）、「光悦考」淡交社（2018年）、「観じる名碗」世界文化社（2018年）、「玉水焼—歴代の作品とその歴史—」淡交社（2021年）、その他著書多数。

発行者：京都大学ELP事務局

発行日：2025年5月

本書に記載されている内容が無断で転用・転載することを禁じます。



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

京都大学ELP事務局

〒606-8303京都市左京区吉田橘町1橘会館内

TEL:075-753-5158 / FAX:075-753-5154

URL:<http://www.elp.kyoto-u.ac.jp/>

Email:info@elp.kyoto-u.ac.jp